

1 . 環境共生型地域づくりに対する神話・伝承の役割を解明す

るための環境社会学的研究 - 八郎太郎伝説を例に -

総 合 考 察

谷口 吉光

(秋田県立大学生物資源科学部准教授)

1 . 研究の目的

近代科学が導入される以前の時代では、環境保全の知識や技術は、神話・伝承・宗教などの精神的知識 (spiritual knowledge) と密接に関連していた。例えば、森や水源地に神社が置かれているのは、その場所を神聖な場所と見なすことによって、森の伐採や水源の汚染を未然に防いでいたと考えられる。あるいは漁民や狩猟民族では、獲物になる生き物を聖なるものと考えることによって、乱獲を抑え、資源保護を図る慣習が広く見られる。

これからの環境共生型地域づくりを考える際には、専門家による科学的知識の活用は当然のことだが、住民の日常生活に浸透している精神的知識の活用を考える必要がある。環境社会学には「精神的知識 - 住民の行動 - 環境保全」を関連づけて研究するアプローチがある。本研究はこのアプローチを八郎湖流域に適用して、八郎太郎伝説の概要を調査するとともに、伝説が地域住民の環境保全意識や行動にどのように影響してきたかを明らかにしようとする試みである。

私が八郎太郎に注目する理由は次の3つである。

第一に、八郎湖岸には八郎太郎を祀った神社や碑が多数存在しており、潟の治水、漁業の安全祈願、漁業資源の保護などと八郎太郎伝説が関連していたものと推測されるが、この分野の研究はまったく手つかずである。同様に、米代川流域には、八郎太郎が川の治水や新田開発に関係したといわれる史跡や行事が残されているが、これらについても調査が必要である。

第二に、八郎湖流域では最近地域住民によるさまざまな環境再生活動が行われており、今後、住民が主体となった環境共生型地域づくりが進んでいくものと期待される。興味深いのは、そうした活動のシンボルとして「八郎太郎」の伝説がしばしば使われていることである (例えば、潟船保存会による植生再生プロジェクトは「八郎太郎プロジェクト」と呼ばれている)。そもそも「八郎潟」という名前に「八郎」が冠されているように、これからの八郎湖流域の地域づくりに八郎太郎伝説がシンボルとして使われていくことには十分な理由があるが、八郎太郎伝説に関する基礎的な情報を提供する研究はまだ行われていないので、この機会にそれを行いたい。

第三に、この調査は八郎湖を中心として十和田湖や田沢湖も対象とする。調査の結果として、八郎太郎を手がかりにして、八郎湖・十和田湖・田沢湖の三湖をつなぐ伝承が明らかになることが期待できる。それは秋田県に新しい観光的魅力を付け加えることになるだろう。

2 . 研究内容と体制

(1) 研究内容

八郎太郎の伝承記録を収集する（文献、研究書、図案など）

伝承と住民の環境保全の関係に関するフィールドワーク（八郎湖、十和田湖、田沢湖等）

地域づくりに対する八郎太郎伝説の可能性を検討するためのワークショップ(1回)

総合考察

（２）研究体制

研究代表者 谷口吉光

共同研究者 鐙 啓記（無明舎出版）、天野莊平(同)、永井登志樹(同)

本研究の一部は無明舎出版への委託研究の形で行った。

（３）研究期間 2006 年 10 月 1 日～2007 年 3 月 28 日

３．主な成果

（１）八郎太郎伝説の広域性

八郎太郎伝説を秋田県だけに伝わっている伝説だと考える人もいると思うが、今回の調査によって、実は北東北に広く伝説が伝播していることが明らかになった。青森県八戸市を中心とする南部地方、津軽地方、岩手県北上川流域などに、八郎太郎に関連するモニュメントや伝承が広く残されている（その様子は本報告書 G - 1 の地図を参照されたい）。今回時間的制約のためにこの程度の情報収集しかできなかったが、調査途中の津軽地方など、今後の調査によってより多くの情報収集が期待できる。

北東北に伝播している伝承の共通点として、洪水伝説の要素がある。「八郎太郎が自分の住処を作ろうとして流れている川を堰き止めようとしたが、地元の神々によって反対されて失敗し、その場所を追われた」という内容である。今回の調査では、このような伝承が北東北 3 県で 18 箇所発見された（G - 1 の地図参照）。これを十和田湖の噴火に伴う土石流の発生と関連づけて、十和田湖の噴火による土石流が流れた跡と八郎太郎の伝承が残されている場所が符合するのではないかという仮説が考えられる。今回の研究の中ではそこまで踏み込めなかったが、大変興味深いテーマである。今後追求していきたい。

八郎太郎伝説は、ただ北東北に広く伝播しているだけでなく、地域によってさまざまな多様性を持っている。たとえば、「八郎太郎」という名前にしても、青森県南部地方では「八の太郎」、津軽地方では「八郎」などと呼ばれている。また十和田湖をめぐる八郎太郎と南祖坊の戦いにしても、秋田では敗れた八郎太郎に同情的だが、南部では南祖坊に味方する説が強いという。

このように、八郎太郎伝説の広域性と地域的多様性を考えると、これからの北東北の相互理解と連携を図る際に、八郎太郎伝説は格好の学習素材になるのではないかと期待される。

（２）八郎太郎伝説の複雑性

一口に八郎太郎伝説を言っても、次のような多岐に渡る内容を含んでいる。これらを結んで十和田湖・八郎潟・田沢湖の「三湖伝説」として語られている場合もある。

太郎誕生にまつわる話

太郎が十和田湖を作った話

太郎が南祖坊との戦いに敗れ、十和田湖を追われる話
太郎が新たな湖を作ろうとして川をせき止めようとしたが失敗した話
太郎がニッ井の七座山付近の米代川をせき止めたが、ネズミに堤に穴をあけられ、大洪水が起きて流された話
太郎が米代川下流に洪水を起し、八郎潟を作った話
その際に、天瀬川の長者夫婦が別れ別れになる話
太郎が田沢湖の辰子に恋して、冬の間を田沢湖で過ごす話
田沢湖に通う道々で泊まる宿に、礼の秘法を授ける話
太郎が一ノ目潟の女神に嫌われ、竹内真康の矢に打たれる話 等々

『日本伝奇伝説大辞典』の「八郎潟の八郎太郎」の項目を見ると、「三湖伝説はもともと一編の物語として成立したのではなく、広い地域に散在していた数多くの断片的な物語や後日譚などが集められたもの」(野添憲治)と書かれている。確かに、これほど多面的で広域に渡る物語が誰かの意思によって体系的に構成されたとは考えにくい。むしろ、各地に生まれた伝説の断片が継承・伝播されていくうちに、相互に交流し混ざり合い、あたかもひとつの物語として「成長」していったと考える方が自然だろう。

幸い、今回の調査で八郎太郎に関して、江戸時代の古文書を含む大量の文献を収集した(本報告書DとFにはその目録と重要な文献のコピーを挿入しているので参照されたい)。今回の調査によって、おそらく八郎太郎伝説に関して最も充実した資料集を整備できたと考えている。

こうした文献を丹念に突き合わせることによって、八郎太郎伝説の各部分の成立時期を推定することが可能である。たとえば、本報告書Bでは、永井登志樹氏が「三湖伝説」の成立を昭和3年(1928)に刊行された『十和田湖傳説』〔本報告書B-1に所収〕と、同年の『田沢湖十和田八郎潟戀の三角伝説』〔B-3所収〕に求めている。このような作業をもっと古い時期から行なうことによって、八郎太郎伝説の形成過程をあたかも「系統樹」のように再構成することができれば大変興味深いだろう。今後の課題としてぜひ取り組んでみたい。

(3) 八郎太郎と辰子の多様なイメージの収集

八郎太郎伝説がどのように人々に認識されていたのかを知るために、八郎太郎と辰子に関する画像を収集した。現在までに流布している絵本の類まで含めると範囲が広すぎるので、特に八郎潟と田沢湖周辺に残された、比較的古いものを中心に収集した。その結果、次のようなイメージを集めることができた(撮影はA-3は永井登志樹氏、それ以外は天野荘平氏)。



図A - 1 八郎太郎像
(昭和野村の八郎神社蔵)



図A - 2 八郎太郎像
(三種町大口の八郎神社蔵)



図A - 3 八郎太郎像
(大仙市鳥井野の佐々木氏蔵)



図A - 4 女性の八郎太郎像
(三種町新屋敷の児玉氏蔵)



図A - 5 頭が龍形をした八郎太郎像
(潟上市野村の八郎神社蔵)

これらの画像はいずれも神社または個人蔵であり、大変貴重な資料を収集できたと思っている。興味深いのは、一口に八郎太郎といっても驚くほど多様なイメージで描かれていることである。図A - 1と2の太郎は神話的氛围気を漂わせているが、いずれも八郎潟周辺の八郎神社の所蔵品であることを考え合わせると、漁業安全と豊漁祈願を司る神としての八郎太郎はこのような神秘的な人物としてイメージされたのだろう。図A - 3では江戸時代の旅装束に身を包んでいるが、この掛け軸は八郎が辰子に会うために田沢湖に向かう途中の「八郎の宿」に当たる家で所蔵されていたものであることを考えると、江戸時代の旅人としての八郎太郎を強くイメージしたのだろう。

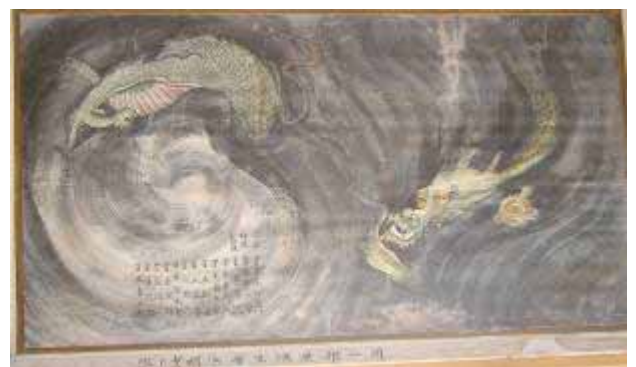
非常に奇妙な像が図A - 4と5である。図A - 4は何と女性の八郎太郎の像である。これを所

蔵している三種町新屋敷の児玉家では八郎太郎は女性として伝承されているという。また、図A - 5は頭が龍形であり、見るからにおどろおどろしい。このような太郎像が書かれた背景は今のところ不明であるが、いずれにしても、こうした多様なイメージを見ると、現在一般に流布している「背の高い、心やさしい人間の若者」という八郎太郎のイメージは歴史の一時期における造形に過ぎないということがよくわかる。

また、龍の姿をした八郎太郎はどのように造形されているだろうか。今回は八郎潟周辺の神社に奉納された絵馬を数点収集できた。図A - 6と8に描かれた龍は、黒雲に乗って空を駆ける雷神の印象を受けるが、図A - 7はむしろ渦巻く水の中に姿が見え隠れしているように見える。これらの龍の画像のより精密な分析は専門家の助言を必要とするが、いずれにしてもここに描かれているのは大変恐ろしい龍の姿であって、と漁民が八郎太郎に象徴される自然の力に非常に深い畏敬の念を抱いていたことが感じられるのである(撮影は図A - 6は永井氏、それ以外は天野氏)。



図A - 6 龍神像(能代市・小繋神社蔵)



図A - 7 龍神像(潟上市・八大龍王神社蔵)



図A - 8 龍神像(潟上市・八大龍王神社蔵)

また、今回は、八郎太郎に関連して田沢湖の辰子についても調査することができた。そこで田沢湖周辺にある5つの辰子像を紹介したい（撮影はいずれも永井氏）。



図A - 9 辰子像（仙北市）



図A - 10 姫観音像（仙北市）



図A - 11 辰子観音像（仙北市）



図A - 12 たつ子姫像（仙北市）



図A -13 辰子像（仙北市・大蔵観音） 最も古い姫観音の建立が1939年なのをはじめとして、い

図A - 9 は高村光太郎の弟子で彫刻家として有名な舟越保武氏が1968年に制作したもので、辰子のイメージとしては最も有名である。図A - 10 は、玉川の酸性水が田沢湖に入り、昔の趣が失われることを惜しんで、土地の有志が辰子の霊を慰めるために1939年に建立した姫観音である。図A - 11 は1968年に建立された姫観音像。豊満な印象から「おっぱい観音」の別名がある。図A - 12 は御座石神社境内にある像で、1981年と最も近年の製作であるが、上半身が人間で下半身が龍という人魚を思わせる造形である。図A - 13 は、辰子が願かけをしたと言われる大蔵観音の跡地にある木製の祠の中に安置されている辰子像で、やさしい顔の辰子の横に龍が顔を並べているのが印象的である（制作年は不明）。

ずれも製作が昭和期だということである(図A-13の大蔵観音の辰子像だけは制作年が不明であるが、塗料がきれいな色を留めていることなどから昭和期だと考えることにする)。今回、辰子伝説についても若干の資料を収集したが、そこで明らかになったのは、辰子伝説の起源は古いものであるが、「辰子」という名前で現在あるような形で語られるようになったのは明治期以降のようだという事である。このあたりも、八郎太郎伝説と同じように、伝説の歴史的形成過程を分析すれば興味深い結果が得られるだろう。

(4) 神としての八郎太郎の多面性

八郎太郎は「神」だと考えられるが、「神」としての性格は多面的で複雑である。もともとマタギの若者だった八郎太郎は、マタギの戒めに反して仲間のイワナを食べてしまったために龍に姿を変えさせられるというのが八郎太郎伝説の始まりである。この通りだとすれば、八郎太郎は戒めを犯した「罰」として龍(という神)に変えられしまったことになる。その背後には太郎を龍に変えた、より高次の神が存在しているはずだが、その神に関する言及は伝説を通じてなされていない。加えて、龍に変身したはずの八郎太郎だが、時に人間の姿にもなったようだ。二ツ井の七座山で大洪水を起して八郎潟湖岸の三倉鼻にたどり着いた八郎太郎は地元の長者夫婦の家に泊めてもらうということになっているが、その時は人間の姿だったに違いない。また、八郎潟に棲み着いて以後、田沢湖の辰子に会いに行く時には、大崎地区にある「足洗いの井戸」で足を洗って、徒歩で田沢湖に通ったようである。途中泊めてもらった「八郎の宿」では、寝る前に家人に「寝ている間の私の姿を見てはいけない」と言い残したとあるから、この時も人間の姿だったことになる。

伝説中に現れる八郎太郎には次のような神の性格を見て取れる。

十和田湖や八郎潟を作った「国土創成の神」

水を司る「龍神」

南祖坊(仏教・熊野修験道)と戦った地元宗教の神

川をせき止めようとした「農耕の神」

川を氾濫させる「洪水の神」

八郎潟の豊漁と安全を司る「漁業の神」

一ノ目潟の女神を襲った「雷神」

田沢湖に通い、辰子と愛し合う「若者」(人間くさい神)

泊まった宿に秘法を授ける「まれ人」

これらに共通する八郎太郎の性格を抜き出すことができるだろうか。これについては本報告書Bで永井氏の次のような意見に私も同感する。「『十和田記』をはじめとする各種縁起類や由来記、本地記録物に描かれた説話的で長大な物語とは別に、八郎太郎伝説にはいかに仏教的な装いを凝らしてみても、もっと素朴で原初的な国土創成伝説、地名起源伝説、地形由来伝説、巨人伝説といった要素が内包されており、そのことがこの伝説と主人公である八郎太郎というキャラクターをより魅力あるものにしているように思える」。

確かに、十和田湖をめぐる南祖坊と八郎太郎は戦った。これをもって仏教間の勢力争いがあったことを推測する井上隆明氏の説もある。それによれば、八郎太郎の先祖は北秋田郡旧比内町独鈷の大日堂別当である。「大日」は真言宗の象徴であることから、井上氏は八郎太郎を真言宗

に属する宗教勢力を表しているとし、対する南祖坊を熊野修験僧としての経歴などから天台宗に属すると解している。そこで八郎太郎と南祖坊の戦いは「真言文化圏の敗北」「平泉系天台宗の鹿角占拠とった宗教文化地図の塗り替え」という歴史的事実を示唆すると考えるのである。

しかし八郎太郎には、仏教であれ修験道であれ、宗教的修行者としてのイメージが限りなく薄い。私は神としての八郎太郎の原イメージは、アニミズム的な自然信仰の対象である自然が人格化されたものだと考えたい。前節で述べたように、八郎潟湖岸で発見された八郎太郎のイメージは神話的な神秘的人物であるが、田沢湖を追われ八郎潟にたどり着くまでの八郎太郎と、後に八郎潟から田沢湖に通う八郎太郎には、素朴で、力強く、心やさしいが、どこか淋しげな若者として、人間くさい神のイメージが濃厚に感じられる。そのイメージは、永遠の美を求めて罰せられ龍に変えられた田沢湖の辰子にも共通する。素朴で、美しく、心やさしく、人間らしい欠点も備えた辰子。秋田で八郎太郎と辰子の伝説が長い間語り継がれ、愛されてきた背景には、この2人の主人公の人間的な魅力あふれる神としての性格があったからだと思う。

(5) 八郎潟周辺や男鹿半島における八郎信仰の濃密さ

次に、八郎潟と男鹿半島に的を絞ってみると、この地域における八郎太郎信仰の濃密さに驚かされる。天野荘平氏の調査によって、この地域に八郎太郎を祀った神社や祠が37箇所確認されたほか、漁業者による「八郎講中」が過去14箇所あったが、現在は1箇所しかないことなどが確認された。神社や祠の所在地は本報告書のG-3の地図を参照されたい。

このうち「八郎神社」として明確に八郎太郎を祀っている神社は船越の八龍神社、昭和野村の八郎神社、大口の八郎神社の3箇所である。それ以外に石製の「八郎祠」が周辺に十数カ所発見された。また直接八郎太郎を祀ったものではないが、「八郎龍王」を祀った神社が天王中羽立をはじめ4箇所確認された。

天野氏も指摘しているように、八郎潟周辺の神社や祠の分布には、いくつかの特徴がある。たとえば、主要な信仰地として船越神社、三倉鼻の夫殿大権現、芦崎の姥御前神社があるが、天野氏は「三倉鼻と芦崎の両地点は元禄時代には郡境だったという。この3地区を政治的視点で考えてみると、熊野信仰と関わりがあるといわれる八郎伝説は藩政時代の政治と宗教が深く関与していたのではないかと考えられてくる」と述べ、「伝説地の背景にはスケールの大きい八郎太郎伝説以上に、とてつもなく深い意味が隠されているのであろうか」と、八郎湖周辺の信仰地の分布の背後に藩政時代の宗教と政治の関係を示唆している。これについて私はまだ何の意見も言えないが、非常に興味深い指摘であると思う。

また、八郎祠が八郎潟の西岸部に多く存在することは、1965年に発行された『八郎潟の研究』において今村義孝氏が調査した八竜神祠分布(904ページ、図17)にすでに明らかであるが、それについても、天野氏はかつて八郎潟の漁業は南岸と東岸に比較的規模の大きな漁師が多く、西岸と北岸には小規模の漁師が多かったせいではないかという仮説を述べている。

いずれにしても、八郎潟湖岸に残る数多くの神社や祠は、この地域に濃密な八郎信仰が存在していたことを裏付ける。その場合の八郎信仰とは、まず何より漁業の神であった。そのことは昭和北野白州野潟端に祀られている八郎神社社殿の掲額「八郎神社御拝歌」に見て取れる(今村義孝、前掲書、906ページ)。

しかし、同時に、八郎太郎は雨をもたらす龍神として、地域の農民にも信仰されていた。その

例として、三倉鼻の夫殿大権現に雨乞いを祈願する時、鶏を持参し、それを殺して鶏血を周囲の壁に塗りつけて汚すという習慣が最近まであったという。それによって神が怒り、雨を降らすと信じられていたのである。この習慣は八郎太郎伝説において、八郎太郎が八郎潟を創る時に鶏の声とともに長者夫婦の姥を対岸まで蹴飛ばしたという話と符合するように思われる。天野氏は八郎潟湖岸における雨乞いは「龍神信仰」として、八郎信仰と区別する立場をとっているが、私は両者はしばしば混淆されていたのではないかと推測している。

(6) 八郎潟干拓以来の八郎信仰の急激な衰退

このように八郎潟周辺における八郎信仰は主として漁業と密接な関係を持ってきたが、八郎潟干拓によって周辺漁師が漁業権を失い、漁業が急速に衰退したことにより、八郎信仰も急激に衰退した。その一例として、上述したように漁業者によって維持されてきた八郎講中が、現在1箇所しか活動していない点を挙げることができる。

また、湖岸に点在していた祠の多くも、干拓工事につれてその場所を移動させられている。最寄りの神社の境内に祀られているのはまだいいが、なかには移動を繰り返していくうちに祠の由来も忘れられてしまったものすらあった。今回天野氏が発見した男鹿市五明光にある八郎祠は写真のように建設資材置場の小屋の横にあった。この資材置場の所有者の社長はこの祠の由来を知らず、天野氏に教えられて驚いたという。このような八郎信仰の衰退は、八郎潟の漁業が衰退して住民と八郎潟との生活を通したつながりが失われたことから発していると思う。自然と人間の



つながりは、単に物質的につながっているだけでなく、生活において人々が自然をコモンズ（共有地）として共同で利用するという関係があり、その上に自然の力を畏敬するアニミズム的な関係があるというのが本来なのではないか。八郎太郎の信仰の衰退は、八郎潟周辺における人と自然との関係の希薄化、それに伴う人々の心の荒廃を生み出しているような気がしてならない。

図A - 14 男鹿市五明光の八郎祠

4. 「環境共生型地域づくり」のための示唆：ワークショップでの議論をもとに

以上の調査結果を踏まえて、八郎太郎伝説が環境共生型地域づくりのためにどのような貢献ができるのかを検討するために、八郎潟の環境活動に関わる人々や秋田県内でNPO活動に関わっている人々に集まっていただき、2007年2月17日にワークショップを開催した。参加者は安食隆敏（あきたNPOネットワーク代表）、岩谷作一（八竜ミュージカル顧問）、煙山 裕（県立大学3年生）、菅原雅代（環八郎湖の環境学習をすすめる会会員・県立大学3年生）、谷口篤子（地産地消を進める会事務局）、楡井寿枝（環八郎湖の環境学習をすすめる会代表）、三浦新七（潟船保存会事務局長）である（五十音順、敬称略）。その議論から得られた示唆を6点にまとめて紹介したい。

(1) 八郎太郎伝説は八郎潟周辺地域を見直すための格好の素材になりうる。

八郎太郎伝説に関する今回の研究成果を聞いた感想として、参加者から「地元でも八郎太郎伝説は忘れられているが、この伝説を通じて、住民の郷土への関心や愛情が生まれる可能性がある」という指摘があった。従って「地元でフォーラムや学習会を開催して、今回の研究成果を広く知ってもらいたい。また普及用の資料を作成してもらいたい」という提言があった。

(2) 北東北3県にまたがる八郎太郎伝説は、今後の北東北連携の手がかりになる。

八郎太郎伝説が北東北に広がっていることについて、ある参加者は「八郎太郎が八郎潟の神様だということは知っていたが、こんな広がりがあるとは思いつかなかった」という感想を述べていた。この意見を踏まえると、北東北3県にまたがる八郎太郎伝説は今後の北東北連携を進める手がかりになりうる。特に、この伝説は民衆に語り継がれた伝説であるがゆえに、伝説を通じて北東北の深い交流が始まる可能性がある。交流の切り口として、例えば、地域ごとの内容の違い（南部では南祖坊伝説が優勢）や八郎太郎の名称の微妙な違い（八太郎、八の太郎など）をテーマにしたらどうだろうか。

(3) 八郎太郎や辰子は秋田県の県民性を考え直す手がかりになる。

前述したように、八郎太郎や辰子は秋田のアニミズム（自然信仰）が象徴化されたものと考えられるが、逆に言えば八郎太郎や辰子は秋田県の県民性を表しているという解釈も成り立つだろう。すなわち自然に対して、素朴で、親しみやすく、心やさしい信仰心を抱いているという県民性である。これは例えば地産地消において、地域の食材を愛でながら、大切に利用して多種多様な料理や保存食を作るといった伝統にも通じるものである。

(4) 八郎太郎伝説が、八郎潟や田沢湖の自然再生の「導きの糸」になる。

八郎潟干拓は自然を破壊し、魚も獲れなくなり、湖をはさんだ人々の行き来もなくなり、次に「心の荒廃」を引き起こした。その意味で八郎潟干拓は巨大な自然破壊だったし、その被害は今も進行している。参加者からは、八郎太郎伝説が潟と人間の心をつなぐ可能性があることが繰り返し指摘された。たとえば次のような意見が出た。

「八郎太郎伝説の復活は、潟と私たちの心をつなぐことだ」

「伝説を語り継ぐことは心の原風景を受け継ぐこと」

「子どもたちに自然や神の大切さを伝えることによって湖の再生が可能になるのではないか」

「八郎太郎を想う気持ちが、八郎潟を良くしていく」

(5) 八郎太郎伝説は大変魅力的な「観光」資源であるが、事業化には慎重な配慮が必要だ。

八郎太郎伝説または三湖伝説は、一見すると大変魅力的な観光資源に見える。しかし、そもそも目に見えない伝説であり、かつ宗教的な素材なので、それを単純に世俗的・商業的な観光企画に乗せることは難しいし、そうすべきではないだろう。むしろ、かつて十和田湖や男鹿はかつて修験道の聖地であったことや、江戸時代には民衆の旅は「巡礼」（伊勢参りなど）という聖俗が入り交じった姿だったことなどを考え合わせると、私たちが馴染んでいる近代的な観光（ツーリズム）の概念を超越した、より精神的・思索的な内容を含む「観光」の概念と内実を創り出す必

要がある。四国のお遍路や熊野詣でなどが参考になるかもしれない。

八郎太郎伝説は、秋田に住む私たちの心のよりどころになる可能性がある。それを追及する実践を県外の人と共有するなかから、事業化の方向が見えてくるのではないか。

2. 環境共生型に配慮した体験型ツーリズム開発の可能性調査 訪問される魅力的な農村づくりへの試み

荒樋 豊

(秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科)

はじめに

1. 目的

「環境共生型に配慮した体験型ツーリズム開発の可能性調査」と題する本事業は、能代市東部地区を対象に地域資源を活用した体験型総合ツーリズムモデルの構築を図り、米代川流域、白神山麓地域の環境共生型社会の実現に資するものである。

2. 内容

「体験型総合ツーリズムモデル」とは、地域の賦存する資源のワズユースな利活用により、魅力的な地域を創造することであり、定住者のコミュニティ活動を活発化し、さらには地域特有な体験メニューの整備による来訪者の増加を企図する、地域活性化戦略の1つのタイプを指している。

このような地域づくりを進めるためには、「既存農村地域における農村資源の発掘(体験交流への活用性のあるもの)」、「交流への都市住民と農村住民の気運づくり」、「近隣農村地域での受け皿整備に関する広域的連携の模索」、「地域資源商品の具体化(農村風情施設と体験メニュー：社会実験として)」、「交流活動を運営する住民組織づくりの調査検討」が必要である。

これら本事業の主旨に応えるため、筆者が数年前から農村活性化に取り組んでいる能代市常盤地区を対象に取りあげ、社会実験としての企画・実践活動について報告する。

この常盤地区における地域づくりの取組は、次の諸点において特徴を有している。第1に、大学と農村との連携した農村活性化の取組であること。第2に、農村活性化を、精神的活性化と経済的活性化という2つの軸で捉え、両軸のバランスを図りながら活動を展開していること。第3に、地域の子供達を対象とした「親子体感教室」という企画においてワークショップ手法を多様に用いていること。第4に、経済的活性化において、秋田県立大学短期大学部の有する農業的資源の地域への普及をおこなっていること。例えば、ダチョウ及びベツレヘムの星(学名：オーニソガラム・シリソイデス)の導入。第5に、当該農村の基幹農作物である「お米」にアプローチし、地域農業の再編を視野に入れて、有機質堆肥活用による減農薬・天日乾燥を特徴とした付加価値づけのお米づくりを実践していること、第6に、お米など農産物の東京への直接販売を企画・実践し、都市サイドにパートナー集団を獲得したこと、第7に、能代市の街場との連携により、街場で生じている生ゴミ問題と農村サイドで生じている間伐材処理の問題を繋ぎ、間伐材を利用した木製プランターの整備と生ゴミの堆肥化をおこなうことで、能代市全体での花壇づくり運動を推進していること。第8に、グリーン・ツーリズムの受け皿の整備をおこなっていること。第9に、当該農村における地域資源の賦存状況を調査し、資源マップを整備していること。第10に、常盤地区の農村づくりの取組を持続化するため、NPO法人化の可能性探っていること。である。

第1章 住民参加型の農村コミュニティづくり

1. 地域づくりのスタンス

1) 学生と住民の連携による地域づくり

魅力的な農村づくりに寄与すべく、秋田県立大学短期大学部の学生・教員と地域住民が連携しながら、小学校区範囲の農村（能代市常盤地区）を対象にして「むらづくり」実践を続けてきているので、その取り組みを追いながら、地域づくりのポイントを考えてみたい。本取組においては、住民との頻繁な話し合いや活動を通して、現代社会における農村の価値を体感し、農村の現状における克服すべき課題の考察と対処戦略の企画立案をおこない、住民と連携しながら具体的実践を進めることを意図している。

扱うテーマが地域活性化にあることから、次の点が本取組のポイントとなる。

その担い手育成が鍵になり、主に社会教育的な仕掛けが要請される。

各種農村的起業を促し、地域への経済的活性化に関与することが求められる。

すなわち、 に関しては、学生・教員と地域住民のコミュニケーションの促進と住民間の一層の交流を背景にした、住民による各種の学習活動等の構築が想定できる。 に関しては、衰退傾向を深める現状の農業状況を調査分析し、実現可能な農村的な産業育成にチャレンジすることである。例えば、地域の特徴的な農産物を取りあげ、今日的な消費者ニーズに配慮しながら、そのより一層の商品化を検討するとともに、短大が有している技術の積極的普及をおこなう。

具体的な進め方としては、毎週のように学生と教員が現地を訪問し、行政の支援を得ながら、住民との語らいの中で、むらづくり手法の学習や新たなイベント等の創造活動を展開するというものである。住民の地域づくり意欲の向上（コミュニティ学習による精神的活性化）と農村的な新ビジネス（農産物商品の開発等による経済的活性化）の具体案の提示という2つの課題の関連づけが、本プロジェクトの特徴といえる。

なお、このような地域住民を巻き込んだ活性化活動を展開するには、1年をタームとする活動では困難であることから、地域との連携の期間を3カ年とする。その期間内に、住民との信頼関係を構築しつつ、実現可能な各種企画を展開する。

2) 特徴的な地域づくり手法

以上のような目的を遂行するため、初年度目にはワークショップ手法を多用し、住民各層の関心・地域づくり意欲の醸成を促す、いわば社会教育的色彩を強調する。2年度目には社会教育と産業育成の2つの軸のバランスに留意する。3年度目には農村起業的な色彩を強調する。これらを通して、地域住民と学生の手による新たなアグリビジネスの開発と農村資源を活用したグリーン・ツーリズムの受け皿整備が目標となる。

1年度目における活動展開の主な手法であるワークショップは、住民各層の地域づくりへの関心を引き出すことにあることから、小さなグループを組織し、それらグループの属する世代の興味に見合った各種ワークショップを継続的に展開することが求められる。これによ

り、地域づくりへの問題意識が深まり、住民と学生とのコミュニケーションを促すことになる。なお、そのような社会教育的活動を背景に、地域農業の再構築を目指して、開発可能な農産物探しをおこない、加えて本取組の活動内容や意義について、広く地域住民全体へ知らせるためのシンポジウム等を開催する。

2年度目には、地域住民各層からの興味を総合化するために、引き続き社会教育的な諸活動を継続するとともに、産業育成の観点から既存農産物における可能性の検討と具体化を図る。具体的には、当該地域の主要な農産物であるお米（あきたこまち）について、その付加価値づけ（減農薬・天日乾燥の良質米づくり）を企画する。さらには新規農産物の導入として、本学が技術確立している花卉（オーニソガラムのウイルス・フリー技術の栽培）及び家畜（ダチョウ導入）の農家への普及を図る。これらは農家所得の補填に資することを目的にするものであることから、単なる技術移転ではなく、普及・定着の条件整備として、それらの流通ルートや販売手法の開拓に取り組む。

そして3年度目には、付加価値づけ「あきたこまち」の海外輸出や新規農産物の販売促進イベントの実施による世間への周知を図りつつ、地域資源の商品開発と販売を担うNPO法人（地域運営会社）の設立に向けた住民との検討を進める。また、農村の持続可能性を高めるため、グリーン・ツーリズムの受け皿整備の展開を図る観点から、ツーリスト・オフィスの整備や秋田杉の間伐材を活用した花壇づくり運動を促し、地域の景観形成を企画する。

ちなみに、農村再生プロデュースの活動対象地域である能代市の常盤地区は、能代市の東部に位置し、旧二ツ井町に隣接する農村地域であり、稲作を基幹とし、ネギやミョウガの産地としても知られるが、農家兼業化・高齢化の深まりも指摘できる。10の自治会によって構成される。北は白神山地に接している。世帯数は650戸、人口2,176人（平成17年11月現在）の地域である。

学生が主体的に企画し、実践することは容易なことではないが、楽しく、住民自らが暮らす地域社会に関心をもってもらうことをテーマにして、地域の方々との頻繁な話し合いの中で、各種の企画を実施することにした。

以下、平成16年度から3カ年の活動を報告する。

2．活性化実践の地域特性

1）能代市常盤地区の自然

能代市常盤地区は、米代川の北岸にあり、能代橋より約12kmの所に位置している。

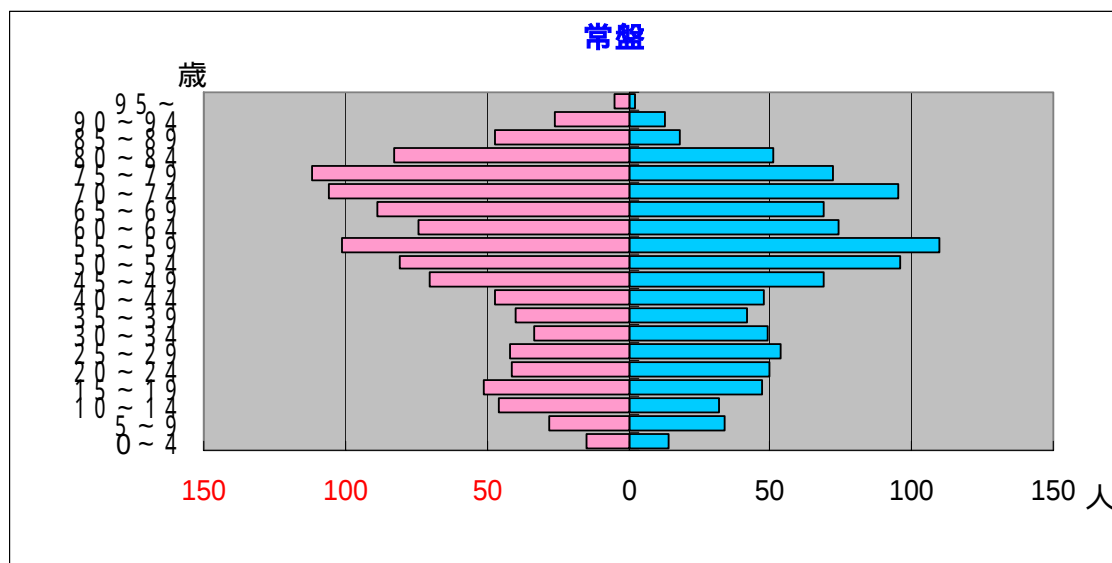
常盤地区は、槐（さいかち）や山谷（やまや）などの16の集落からなり、62.93 k m²の総面積で、能代市の諸地区の中で一番大きな面積を誇る。そのうち、林野率が71%という数字が示すように、相当に緑が多いことを示しているということがわかる。この常盤地区は、能代市の中で唯一、世界遺産である白神山地に接地しており、素晴らしい自然を観察することができる。⁵⁾

2）地区の人口

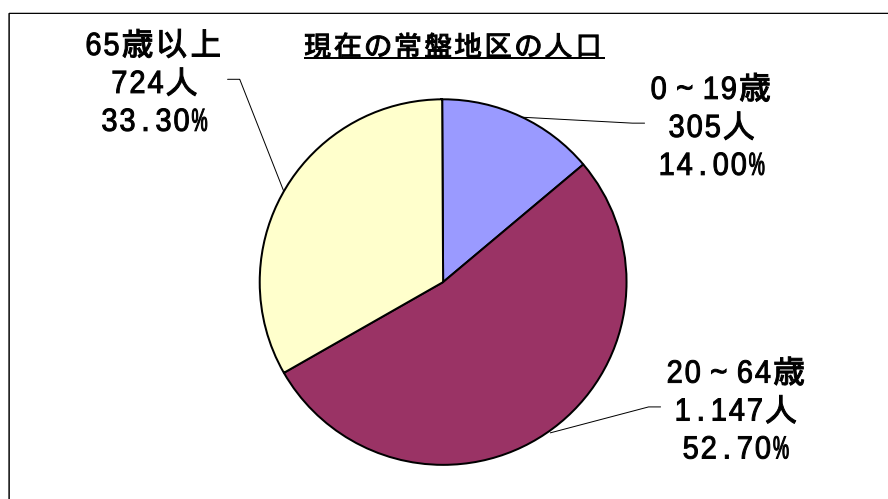
能代市役所まちづくり市民課の調査によれば、平成17年11月1日現在での年齢別内訳は以下

の通りである。

0～19歳：305人（14.0%） 20～64歳：1,147人（52.7%）
65歳～：724人（33.3%）



上の図をみると、男女共に55歳以上から100人を超えており、55歳以上の年齢も割合が多い。しかし44歳以下をみれば、年齢が若くなるにつれて人数が少なくなる傾向にある。



常盤地区の人口を世代別に分けたときの割合

この図から、年齢の幅が大きい20～64歳の割合が多いことはもちろんだが、0（ゼロ）～19歳の子供の割合よりも、65歳以上の高齢者の割合の方が多いということが知れる。

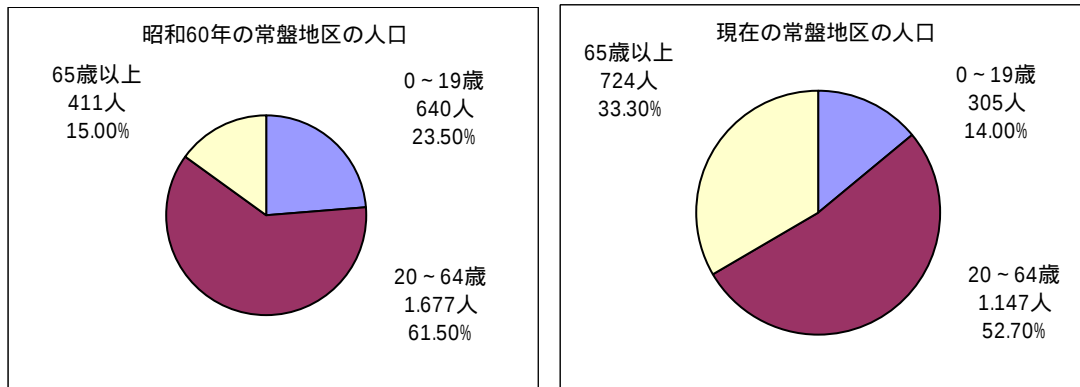
以上から、常盤地区における高齢化および少子化の傾向が一定程度うかがい知ることができる。

平成17年11月1日現在の人口

人口：2,176人
世帯数：650世帯
1世帯あたりの平均人口：3.35人

昭和60年の人口

人口 : 2,728 人
世帯数 : 600 世帯
1 世帯あたり平均人口 : 4.55 人



昭和60年と現在の常盤地区の人口の比較

以上の二つを比較すると、20年で550人ほどの人口が減っていることがわかる。また、この20年間に世帯数は50戸増えているが、一世帯あたりの平均人口は4.55人から3.35人へと減少しており、世帯数が縮小している。いわゆる核家族化が進んでいるといえる。

また年齢別を比較してみると、〇（ゼロ）才～19歳までの割合が半分ほどになっていることがわかる。逆に、65歳以上の割合が約2倍近くになっているということもいえる。また、20～64歳のシェアは小さくなっている。これらの数値は常盤の高齢化の深まりを示すものに他ならない。

3) 産業構成

農業就業人口は570人。農家数は374戸で、その内訳は、専業農家が56戸（15.0%）、兼業農家が301戸（80.5%）、自給農家が17戸（4.5%）である。

経営耕地面積は水田850ha、畑136ha、樹園地3haである。稲作中心の農業が行われているが、地域によっては地域特産のネギやミョウガのほか、生産調整の影響を受けてか、転作作物として大豆も見受けられる。また、地区により違いはあるが、中山間地は小規模の農業が営まれているが、米代川沿いの平場地域は、開拓や最近の圃場整備事業による大区画圃場が整えられ、比較的大規模に行われている。

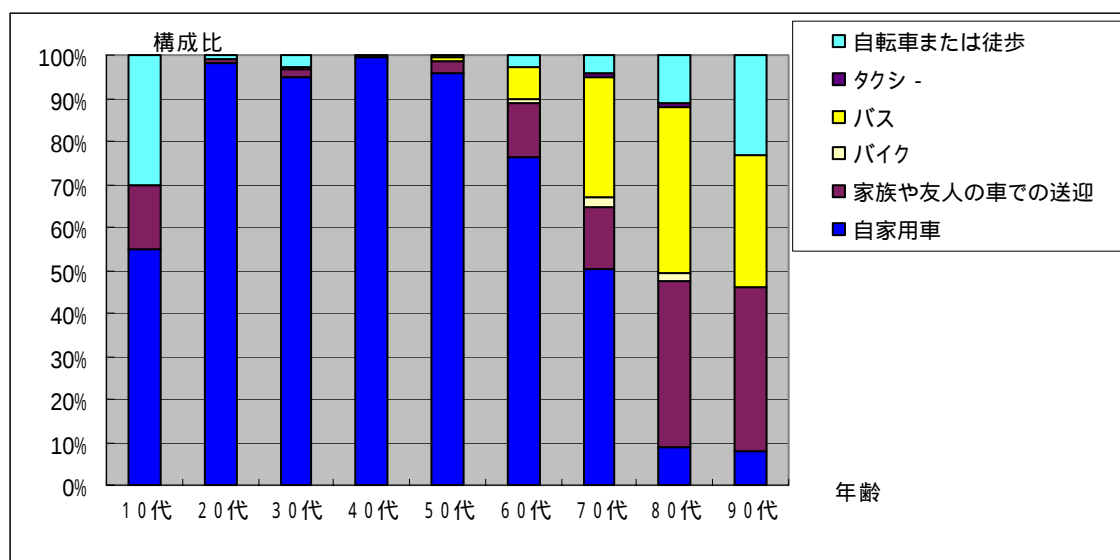
4) 日常生活圏域

日常の買い物は、常盤地域から車で15分程度の能代市東部地域の郊外型大型店で済ませることが多いが、二ツ井町へ出向くこともある。

また、高齢者の通院としては地域内に診療所があり、週1回診療日が設けられる。市内の病院へ移動の際は、自家用車または病院の送迎車、路線バスを利用するのが一般的である。

交通手段は、大半が自家用車だが、高齢者は路線バスに依存するものも少なくない。

文化施設については、小中学校と併設された地域連携施設が完成し、地域住民の活動の場、交流の場などとして利用されている。



常盤地区住民の移動手段について

上の図をみると、20代から50代は90%以上が自家用車を利用していることがわかり、40代はほぼ全員が自家用車を利用している。そして、50代以上から徐々にバスを利用する割合が増えていて、80代以上の高齢者は、約3割が知り合いの車での送迎を利用している。

5) 近年の住民活動

- ・常盤の里づくり協議会・・・自分たちの地域を元気にするのだという同じ目標をっかけ、市と協力して活動を行う。住民の視点で各種地域づくりを展開。
- ・ときめき隊・・・農業による地域の活性化を、手探りで活動にはなるが展開。(県立短大と連携した新規農産物導入、販路拡大。産直施設の建設を視野に入れた朝市の開催)。
- ・常盤の里スポーツクラブ・・・スポーツを通じた地域間・世代間交流や健康づくり(体育館の夜間利用、各種大会の開催など)を展開。
- ・役員による月例会を開催・・・協議会内の情報を全ての人が同じ立場で知る必要があることから、7月から月例会を開始。各種イベントはもちろん、今後の常盤の目指す方向性なども検討をはじめたところ。

3.3 年間の取り組み体制

1) 全体概要

1年度目は、取組のサブタイトルを「地域活性化に向けた親子体感教室」として、地域に暮らす若いお母さんとその子供たち（主に小学生）に呼びかけ、地域の魅力探しに関する各種のワークショップ活用をメインに据えた活動を展開した。この取組に関心を有する2年生の女子学生6名が参加した。

2年度目は、サブタイトルを「地域資源の開発と起業の勧め」とし、地域資源の発掘に壮年男女と高齢者の関与を促すとともに、起業への具体化を試みた。その他、新規農産物の試行的な導入、交流イベント及びふるさとシンポジウムを開催した。この取組に関心を有する2年生の女子学生5名が参加した。

3年度目には、「地域資源の開発と起業の勧め」として、農産物及び農村空間を使った起業的な動きを明確化させるとともに地場農産物の直販ルート開発及び輸出産業としての可能性を探る活動をおこなった。その他、新規農産物の試行的な導入、交流イベント及びふるさとづくりシンポジウムの開催、グリーン・ツーリズム展開に向けたツーリスト・オフィスの整備、秋田杉の間伐材と能代市街地の生ゴミ堆肥とを活用した生ゴミコンポスト堆肥を装填した間伐材プランターの普及による花壇づくり市民運動を企画した。この取組に関心を有する2年生の学生8名（男子3名、女子5名）が参加した。

活動一覧は別表（表1～表3）に示す。

表1 1年度目の活動一覧

2004年		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
経済的 活性化	お米		田植えWS				除草WS	種刈りWS	東京販売				
	ダチョウ			ダチョウ 導入									
	花（ベツレヘムの星）									球根導入			
精神的 活性化	体感教室	植樹祭			生き物観 察WS	資源観 察WS	ジャムづ くりWS				資源 マップづ くり		
	グリーンツーリズム				学生の現 地宿泊			国沙門の森 の改善案					
	シンポジウム							まちづくり フォーラム		ふるさとシ ンポ			
	地域イベント							秋祭り			冬祭り		
担い手 集団	ふるさと協議会	発足								活動報告			
	ときめき隊												発足

表2 2年度目の活動一覧

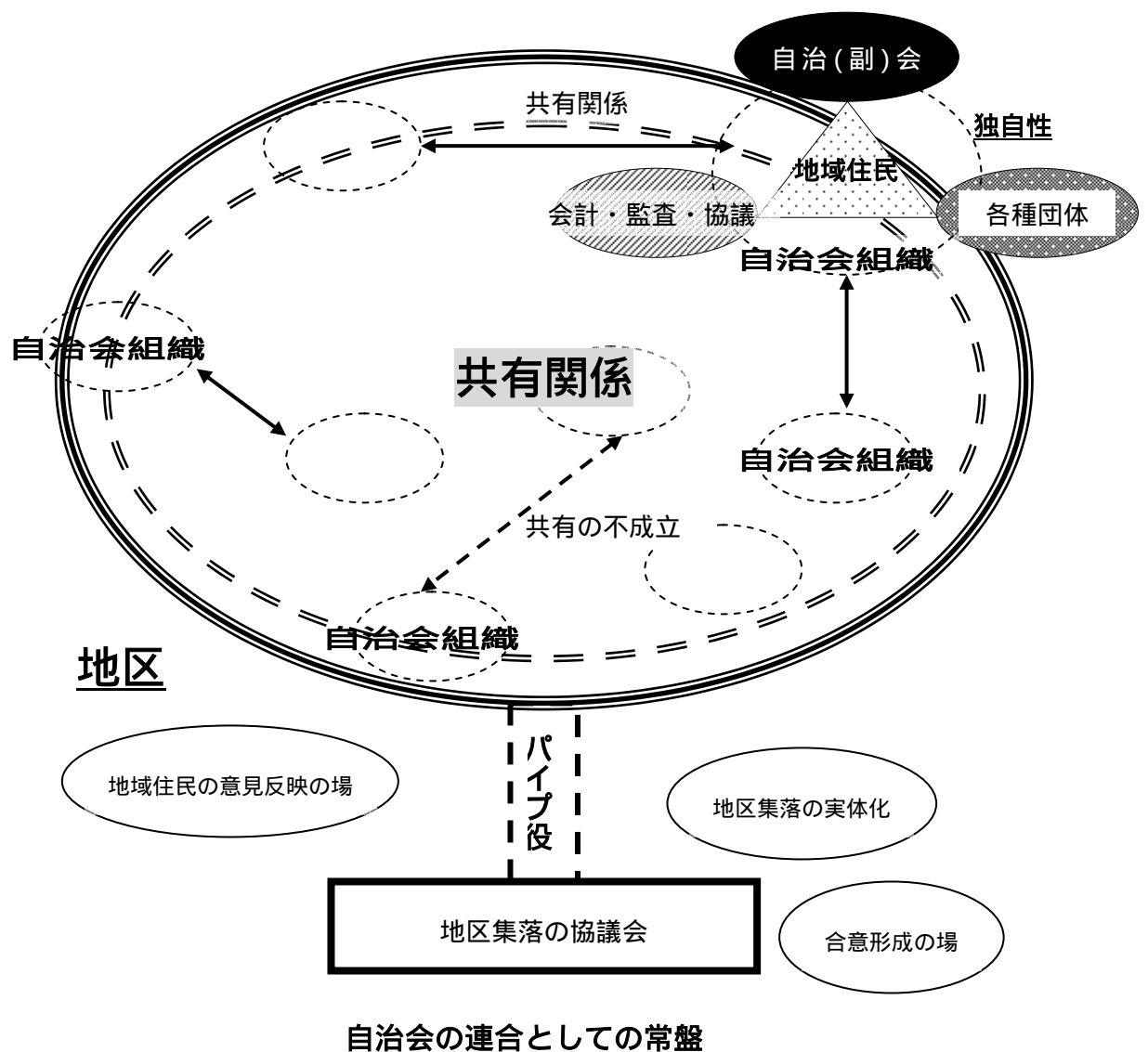
2005年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
経済的 活性化	お米	田植えWS				除草WS	稲刈りWS	東京販売				
	ダチョウ					試食会				試食会		
	花（ベツレヘムの星）	結婚式場 ジャック	押し花教室 WS						球根導入			
	直売イベント	ケヤキ音楽祭での 花販売			朝市		朝市					
精神的 活性化	体感教室	開校式			ドジョウとりWS	鮎捕りWS	都市・農村 交流会					
	グリーンツーリズム				学生の現地 宿泊			炭窯づくり			G.T. オフィス の整備	
	シンポジウム								ふるさとシン ポ(3地区 巡拝)			
	地域イベント						秋祭り			冬祭り		
担い手 集団	ふるさと協議会								活動報告			
	炭焼き隊											発足
	ときめき隊	例会		例会		例会		例会		例会		

表3 3年度目の活動一覧

2006年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
経済的 活性化	お米	作付会合	田植えWS	ハーブ植 え付け		稲刈りWS	東京販売					
	ダチョウ		ダチョウ 導入									
	花（ベツレヘムの星）		結婚式場 ジャック					球根導入				
	直売イベント		ケヤキ音楽祭での 花販売	朝市	朝市・ア ゴラ広場 祭り		エコタウン 祭り					
	海外輸出									フランス に出展		
	提携企業						日比谷花壇	サークル Kサックス	おにぎり 稲米衛			
精神的 活性化	体感教室	開校式	ホテル開 業WS		水遊び WS	ドジョウ とりWS						
	グリーンツーリズム		観光団体との 協働		学生の現地 宿泊					G.T. オフィス の直売機能		
	シンポジウム								ふるさとシン ポ(広域)			
	地域イベント						秋祭り			冬祭り		
担い手 集団	ふるさと協議会								活動報告			
	ときめき隊	例会		例会		例会	例会		例会		例会	
	炭焼き隊	例会			例会		例会			例会		
新活動 の創造	NPO法人								起ち上げ 合意			発足
	花壇づくり運動									発足		

2) 常盤地区の組織的特性と地域づくりの必要性

常盤地区は、16 の集落から構成され、各集落には村落自治組織が存在している。これらの自治組織は、地域住民のコミュニケーションづくり（親睦）を図り、明るく住みよい環境づくりを目指している組織である。各自治組織の内部には、自治活動を下支えし、住民間の意思疎通を図るための多様なグループが形成される。たとえば山谷集落における住民グループの数は、15 カウントされる。大柄集落は 18 である。このように日常的な社会的接触が濃密であることによって地縁的な結束が強固なものとなっている。その結果、集落ごとに、自治組織として独自に機能しているといえる。常盤地区という範囲に自をむければ、地区組織としての団体活動（たとえば行政への

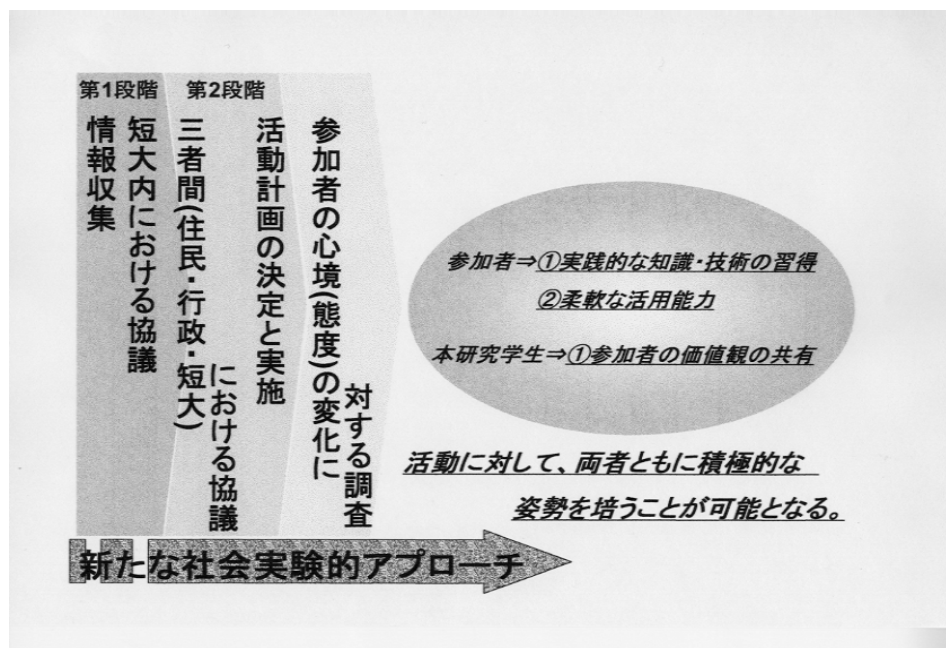


誓願等)が行われているが、各集落が持ち備えているような直接民主主義的な合意形成機能や「地区としての自治組織」はまだ確立されていない。

そこで、近年この地区組織を強化するために「常盤の里づくり協議会」が設立された。この「常盤の里づくり協議会」は、集落間の「パイプ役」として働き、集落の枠を超え、「地域住民の意見反映の場」あるいは、「地区の合意形成の場」なることが期待できる。

このことから、以前は連帯関係が薄かった集落間においても、同地区内というつながりから集落内、また地域住民内で多くの意見交換が行われるようになりつつある。つまり、各集落間での意思疎通的な連帯関係を構築することにより、各集落の内部において住民の共属意識を確認し合うことができる。結果として集落の独自性、自主性を育て、それらの利点を地区全体としての地域づくりの活力を生み出す可能性が指摘できる。今後、行政に対する協議の主体として、自ら地区の将来ヴィジョンの自主的策定の主体として、この「協議会」の働きが大きく影響するだろう。

以上、述べてきたように、能代市常盤地区においても、高齢化が深まり、農家経済の低下、都市的生活様式による旧来的農業生活様式の崩壊がみられている。さらに、自治組織の機能低下により、地域住民間のコミュニケーションの希薄化がうかがえる。しかし、常盤地区には、エコロジカルな自然生態系や地域文化の豊かさ、そして常盤地区の地区形態から多様な地域の価値があると考えられる。これらのふるさとの良さ



新たな社会実験的アプローチ

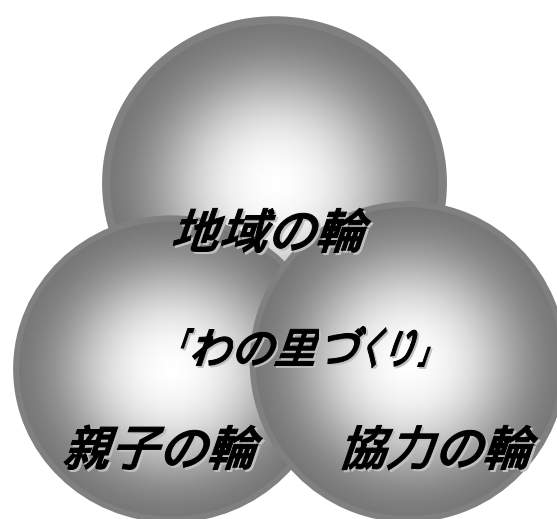
を再発見しながら、地域づくりを図ることは、個々人にとって、そして全住民にとって住みよい地域社会の形成につながる。これは常盤地区に定住する上で重要な事項である。さらに都市住民の来訪を目的とした地域づくりは、農村地域にとって、経済活動を活発化させるだけではなく、異なる地域文化の交流促進によって、新たな価値創造を地域社会に刺激する。このように、地域づくりの実行は、地域住民自身にとってだけでなく、訪問する人々にとっても魅力的な地域社会の創造に繋がるのである。

3)「わの里づくり」(親子体感教室)

地域住民、行政、そして短大との3者の協議の結果、行政の支援を借りながら「親子体感教室」として地元の親子12組を選抜した。そして、「親子体感教室」では、諸活動を通し、最終的には親11人、子供17人の合計28人の親子が地域住民の方々、行政、そして短大と協力して親子体感教室を実施に至った。

さらに「親子体感教室」では、積極的に行政(能代市)と関係を持っている。そもそも常

盤地区は能代市の編入町村であり、能代市が進めている能代都市計画の地域別構想に基づきながら、活性化のあり方を検討していくべきである。つまり、これらの関係を持つことによって、地域住民と行政と短大との3者間での協議を可能にしている。



「わの里づくり」の含意

また「わの里づくり 親子体感教室」は、地域に暮らす小学生とその親が地域の豊かさを身体で感じることを目的にし、「親子体感教室」と命名した。さらに「わの里づくり」の「わ」とは、常盤という地名の「わ」の音を、人々がつながる「輪」のイメージに重ね、親子の輪、地域の輪、協力の輪を再び取り戻そうとの願いが込められている。この教室名称の経緯は、当初「親子体感教室」の参加者内で募集し命名する予定であったが、「親子体感教室」参加者との話し合いが取れずに短大案で命名することになった。

諸活動の行動範囲は、常盤地区の常盤小中学校の交流センターを拠点し、特に山谷地区、大柄地区を中心に地域資源の探索をし、稲作体験では、常盤本郷集落を中心に地域住民から任意で借用した水田を用い、活動を展開した。

農村活性化の働きかけには住民の主体性が重要事項である。まずは住民自身が農村地域に暮らすことの価値・誇りを見出すことが必要である。そこで短大では、地域に住む親子が自らの地域を肯定的に受け止め、地域に暮らすことの誇り戻すことを支援する活動として、この「親子体感教室」を位置づけている。より良い地域社会づくりに向けた住民活動を促すことを目的にしている。対象を親（母）および子と設定理由は、以下の通りである。

この活動を通してながら、“楽しさ”や“喜び”などの記憶を作ることによって、地域資源に対する思いの変化（良い印象へのシフト）、また活動から習得できた地域の良さや価値を子ども自身が認識することで、今後地域で暮らす価値を見出していくことができると考えられる。

親子体感教室に参加する親、特に母親（若い女性）は、感受性豊かであり、かつ環境適応に対し敏感であると考えられる。このことから活動を通し、地域住民では気付くことができない地域に対するアイデンティティの創出を見出せると考えられる。

また子供という媒介を通すことで、特に地域に住む高齢者（つまり親の親）が活動に対して興

味関心を持ち、活性化に伴う地域づくり活動につながると考えられる。さらに高齢者は、次世代を担う子供たちに自らが代々継いできた地域を誇りと考え、地域文化を継続して欲しいと望む傾向がある。そのため、これらの活動への協力も得やすい。

4．精神的活性化のためのイベント企画

1) 1年度目のイベント

地域活性化とは、農村地域社会の置かれている状況を地域住民が対自的に捉え、個別的な欲求の充足を図りながら、多様な働きかけをなすことであり、経済水準の向上と同時に個々人の欲求充足を高め、さらに地域連帯のレベルを向上させることであり、住民の自覚的な連帯によって形成される、新たな農村コミュニティを創造していく営為である。これは、地域づくりの企画・実践の担い手は、地域に暮らす住民以外にはないことを意味する。自らが暮らす地域社会を自らの手によって、より良い社会に変えていくという意欲がなければ、豊かな成果は得られない。

このような理解の下で、以下の活動を企画・実践している。親子体感教室では、4月に植樹イベントとして開校式をおこない、農村に暮らす生き物観察のワークショップ(7月)やふるさと観察ワークショップ(8月)、さらにはジャムづくり体験ワークショップを実施し、冬季には親子(小学生8名、母親6名)で公民館に集まり、「常盤の里ときめき物語」と題する地域資源マップを編集・制作した。地域資源への再認識がこれからのグリーン・ツーリズム展開の基礎的条件となるとの考えによる。また、常盤地区では地域の祭り行事はすでにおこなわれなくなっていたことから、住民との協議を経て、新たな秋祭り(10月:高齢者の手作り品の展示や各種スポーツ大会など)と冬祭り(1月:冬の子供の遊び再現など)を実施することとした。

2) 2年度目のイベント

精神的活性化の活動は、昨年から継続しており、ドジョウとりワークショップや鮎とりワークショップをおこなった。前者は、農薬の抑制によってドジョウが戻ってくことをシンボライズするものであり、後者は白神山地から流れ出る常盤川の美しさを確認することにつながる共同体験である。

また、この年は、昨年東京での米の販売に際して協力を得たNPO法人のメンバー(5名)を常盤地区に招き、都市・農村交流のイベントを開催した。農業者や子供たちと一緒に減農薬・天日乾燥のお米の稲刈り体験を実施した後、地域の食材を使った昼食交流会をおこない、コミュニケーションの促進を図った。都市消費者は本物の農業を接し、農村の風情を楽しみ、そして味わうことに歓声をあげる。その姿を介して農村サイドの人々は田舎暮らしの素晴らしさを実感する。そのような交流の機会が得られたのである。

その他に、今年度は、近隣2地区(檜山、鶴形)の地域づくり活動報告を加えた形で、学生の活動報告と地域住民の地域づくりへの意欲に関するふるさとシンポジウムを開催した。

また、秋祭り（10月）と冬祭り（1月）も昨年のように実施し、学生と住民が交流する機会を整えた。2月には、グリーン・ツーリズム展開を目指して、常盤地区の玄関口にあたる四日市集落の集会施設にツーリスト・オフィス機能の整備を進めた。

3）3年度目のイベント

3年度目はこれら経済的な活性化に重点を移してきたが、とはいえ、精神的活性化の活動も着実に実施している。ホテル観察ワークショップ（6月）や水遊び体験（8月）、ドジョウとりワークショップ（9月）を実施した。住民との交流を目的とした学生の現地宿泊（7月）や秋祭り（10月）・冬祭りイベント（1月）、グリーン・ツーリズム受け皿整備を住民と連携しながら進めてきた。1月に開催したふるさとシンポジウムでは、「常盤には綺麗な風景や美味しい米があることが世間に知られるようになってきた。注目されている今こそ責任ある姿勢を示さねばならない。一つの案として、生ゴミコンポストを堆肥とする花壇を作って、広く配置し、美しい風景づくりをしてはどうか。プランターは秋田杉の間伐材を使おう。」というアイデアが示されたのである。これは現在、具体化作業に入っている。2月には、NPO法人のしろ白神ネットワークという街場の組織との連携が話し合われた。3月には秋田県立大学木材高度加工研究センターからの技術協力を得て、都市住民と農村住民の混合による間伐材プランター制作のワークショップが計画されている。常盤の間伐材と能代市街地の生ゴミ堆肥とが都市・農村住民の手による市民運動として、花壇づくりという形で連結されつつある。そのほかに、整備を進めているグリーン・ツーリズム・オフィスに直売機能を付加する活動も展開した。

5．経済的活性化のためのイベント企画

1）1年度目のイベント

経済的活性化に関しては、付加価値づけしたお米の栽培をスタートさせた。既存のお米では消費者の関心を惹きにくいことから、減農薬栽培にチャレンジし、さらには秋の農村のかつての風情を醸し出していた「杭掛け」による天日乾燥の方法を採用した。高品質のお米づくりの選択は、都市消費者との間に信頼関係を再構築する上でも重要な要素であるとともに、農業者自らが職業人としての誇りを取り戻す機会にもなるとの認識に基づいている。

5月には、農家から借りた1反の圃場で親子一緒になって昔ながらの田植え作業を体験ワークショップとして実施し、9月に雑草とりをおこなった。10月の稲刈り体験ワークショップの実施によって、参加した親子は農作業のたいへんさ・面白さを実感することになった。この時に収穫したお米を含めた常盤の付加価値米や新鮮野菜を学生が京王線「笹塚」駅舎内で東京の消費者に直接販売（約400kg）をするほかに、下北沢のNPO法人コスファ¹の協力を得て、消費者との交流会を実施した。

また、特色ある農産物づくりという観点から新規農産物の導入を試みた。本学が有する栽培飼育技術の普及を目指して、ダチョウと花（ベツレヘムの星：学名はオーニソガラム）の

農村への導入である。6月にダチョウ雛3羽を、鹿角市のダチョウ農家から仕入れて、常盤地区の農家（2戸）に飼育を依頼した。その後、11月に9羽を導入した。近所の保育園児が興味深げに出迎えてくれた。花に関しては、次年度の開花を目指して12月に本学から関心を有する農家5戸に50株の球根をトライアルとして提供した。

これら新規農産物の導入は、農村における既存資源のより一層の商品化を促す意味でも、ある種のインパクトを与えることを狙ったものである。

まず、ダチョウについては、オーストリッチの皮の利活用はすでに展開されているが、それに加えて、健康食ブームの日本社会においてダチョウ肉の普及可能性やその卵や羽、骨などの活用可能性もあると見込んだことによる。その他、ダチョウは本学において飼育技術及び化学分析も相当程度進められており、野の草を飼料として利用できる優位性を持っている。

もう一つの花についてであるが、ウイルス・フリー技術を確認しているオーニソガラムの導入がある。これは11月頃に球根を植え付け、冬季に簡易なビニールハウス内で育成し、5月頃に開花させることができる、栽培が比較的容易な花である。本学が有するウイルス除去技術及び市場ニーズ創造の工夫により、新たな花として市場流通の可能性があることから、対象農村への普及が可能になるとの見通しで採用した。

2) 2年度目のイベント

経済的活性化の活動としては、前年度からの付加価値米の栽培及び販売活動を引き継いでいる。栽培面積を3反に拡大し、5月には親子に加えて地元高齢者女性の手助けを得ながら、田植え体験ワークショップをおこなった。減農薬栽培において不可欠な雑草とり作業（9月）を経て、10月には稲刈り体験ワークショップを実施している。このときは東京から消費者（NPO法人コスファのメンバー5名）を常盤地区に招いて、一緒に稲刈り体験をおこなっている。また、昨年同様に、刈り取ったお米は高品質米として商品化し、「笹塚」駅舎での直接販売等で約1,100kg程度を扱った。なお、この東京販売では、常盤地区の生産者にも参加いただき、米のほかに野菜等の販売にチャレンジした。

ダチョウの普及に関しては、さらに6羽を導入し、地元の子供たちだけでなく、広く観賞してもらえるようにダチョウ牧場の整備に取り組むとともに、低カロリーで健康の良い肉としてダチョウ肉の周知をおこなった。具体的には、能代市内や弘前市の調理人の方々の協力を得て創作料理を作ってもらい、能代市の料理店を借りて、9月にダチョウ肉の試食パーティを開催した。約150名の能代市住民の参集を得た。その後、地元農村からも「一度、食べてみたい」との声が高まったことから、1月の冬祭りに改めて試食会を実施した。会場内ではアンケート集計機により、各種評価の回答結果をその場で住民に示すこともおこなった。

また、昨冬に導入したオーニソガラムについてであるが、1本の茎から伸びる花は小さな白い花びらをピラミット状につけ、高さ約80cm程で、その清楚さは他にないほど清々しいものである。ほとんど知られていないこの花の魅力をいかにアピールするかを学生と教員との間で考えた。考案されたものは、「結婚式場ジャック作戦」という企画である。能代市の結婚式場と当日の新郎新婦にお願いし、披露宴会場をこの花で飾り、出席者に新郎新婦がこの花をプレゼントするという内容である。当事者から快く受け入れられ、学生が花屋さんでア

レンジメント技術を学びながら、5月に実行に移した)。

その結果、マスコミから多くの取材を受け、ローカルテレビで何度か放送された。学生は、徐々にこの花が知られることを自覚し、花に名前を付けることを常盤地区に提案し、協議の後、「ベツレヘムの星」と命名した³。

ところで、短大の学生による経済的な活性化の取組を昨年来、みていた地域住民の中から、ときめき隊の例会の折に、「朝市」をおこないたいとの声があがり、各農家の野菜の販売活動が具体化した(6~10月の野菜生産の盛んな時期に限定)。約10名の農家女性が、常盤地区の中心地に毎週日曜日の朝6時ころから8時頃まで露天で直売の店を開く。短大もこれを支援すべく、月に1度くらいのペースで参加している。

3) 3年度目のイベント

3年度目の経済的活性化の活動は次のようである。

まず、お米をみれば、昨年までは、圃場を借りて、学生による栽培を基本としてきたが、今年は常盤地区の農家の方々による栽培を含めて遂行することとした。8戸の地元農家から、「自分の家でもおおよそ1反程度なら、減農薬・天日乾燥のお米づくりをしてみよう」という声があがったのである。短大学生の担う圃場は1反であり、付加価値米の栽培の取り組みでくれる農家はそれぞれに1反程度を担う。学生による米づくりは、5月に親子や地元高齢者女性の手助けを得ながら田植え作業をおこない、7月に害虫を追い払う目的でブラックペパーミントというハーブを畦畔に植え付けた。また、東京販売の実施時期が遅かったことから(天日乾燥をするには圃場での杭かけに2~3週間を要する)、今年は刈り取り時期を早め、9月下旬に稲刈り体験ワークショップを実施した。参加農家もおおよそ同時にバインダーを使って刈り取りを進め、農村的風情をかもしたず、美しい「杭かけ」の風景が圃場に戻った。

この良質米の販売について、販路開拓のための戦略会議を開き、4つの売り込み作戦を立てている。一つは昨年同様、「笹塚」駅舎での直接販売と下北沢の消費者への販売であり、二つは県内コンビニへの販売であり、三つは東京のおにぎり業者への販売である。農家のお米を合わせて、おおよそ5,000kgを取り扱った。

まず一つに、東京への直接販売の総量は1年目の400kgから1,500kgに拡大している。そのうち「笹塚」駅での販売については、開店して2時間の間に農産物の半分が売れてしまうという経験をした。京王電鉄の担当者は「3年目を迎えることから、秋になると秋田からの直売企画を消費者が心待ちにするようになったのではないか」と語っている。

二つに、サークルKサンクスというコンビニ会社が地産池消をテーマとした農産物キャンペーンするとの情報を得て、学生と農家で生産している減農薬・天日乾燥のお米の売込みをおこない、2週間の限定販売としておにぎり商品を扱ってもらいことになった(1,800kgを販売)。秋田のヒーローである「超神ネイガー」と学生と一緒に稲刈りしている姿を大々的にキャンペーンすることになり、学生らは自らが宣伝企画に参画していることを自覚化する契機となった。なお、三つめの販路は、おにぎり権米衛という会社(東京で店舗展開)であったが、供給量の問題があり、頓挫した。

四つめに、減農薬・天日乾燥のお米に関するブランド形成を図るため、食大国であるフラ

ンスへの海外輸出にチャレンジした。フランスにおける情報発信機会について調査し、リヨンで開催されるシラ見本市への出展を具体化した。このような活動はマスコミにも取りあげられ、少なくとも県内では「常盤の天日乾燥米」（フランスに対しては“ten’pi”、日本ではときめき米）というブランドが徐々にではあるが根づきは始めている。

次に、「ベツレヘムの星」について記す。昨年の「結婚式場ジャック作戦」が好評であったことから、今年は、秋田市の結婚式場に場所を移して、同様の企画を実施した。新郎新婦の了解の上で披露宴会場を「ベツレヘムの星」で飾るという企画は、秋田県内に比較的広く知られるようになってきている。テレビ局（秋田朝日放送、秋田テレビ、秋田放送など）や新聞（秋田魁新報など）マスコミの取材攻勢を受けることとなった。秋田市内の大手花屋から仕入れの希望などもみられた。また、能代市ケヤキ公園での直接販売も盛況であった。2年目に農家に託したのは15戸で計400鉢程度であったが、栽培への関心の違いから、開花時の仕上がりにムラを生じさせたとの反省を踏まえて、本年度は「良い花を作ろう」とのスローガンの下に農家を絞り込み（12戸）、計500鉢を扱うことにした。能代市内だけでなく、秋田県内消費者の「ベツレヘムの星」への関心がみられつつある。今後、良質な花の提供が進めば、農家の冬場の副収入として定着する可能性がみえてきた。また、日比谷花壇からの問い合わせを得ている。

ダチョウの普及については、各地にみられる農産物直売所のマスコットにすべく、移動動物園のような活動を企画したのであるが、アクシデントがあり、十分な展開ができなかった。6月に、新たに、雛のダチョウ5羽を仕入れたが、そもそも体が弱く、受け取ってから2週間程度の間にすべて死亡してしまった。孵化技術に加え、幼少期の飼育技術にも課題があることを知る結果となった。とはいえ、配合飼料に頼らず雑草を餌とする畜産経営的な優位性や健康志向の消費者ニーズを背景にダチョウ肉の価値は明確に存在し、またダチョウの卵の珍しさやダチョウの皮や羽に加えて、骨の活用可能性があることは確かであり、商品化の途が開ざされたわけではない。

さらに、昨年から地元の農家女性の主導で進めている朝市活動も2年目を向かえ、常盤地区に暮らす非農家や高齢者世帯等のほかに、この活動の定着により、一部には能代市街地からも出向いて購入する都市消費者も若干ながら現れてきた。今年は、県や市のイベントへも積極的に参加し、常盤の野菜の直接販売を試みた。自らが生産した農産物が売れていくシーンは生産者のやりがいの醸成に寄与するものである。

6．2つの活動軸を繋ぐポイント

1) ふるさとシンポジウム

以上のような、精神的活性化と経済的活性化の動きを繋ぐものとして、ふるさとシンポジウムを開催した。12月に常盤地区の中心地に位置する常盤交流センターにおいて、住民約100名の参加のもと、学生による全活動の報告や子供たちの体験発表をおこない、本取組の内容について住民への周知を図った。なお、本取組はテレビ放映された²。

本学の常盤地区への関わりの当初に、地域サイドでは「常盤の里づくり協議会」という組織が立ち上げられ、コミュニティの活性化を企画していたことから、その動きと連動させることにした。この協議会は自治会長等により構成される情報連絡を主な仕事とする組織である。また、1年度目の最後の3月には、常盤の地域づくり活動を担う組織として、地元の壮年層約18名が「ときめき隊」を結成し、活動を始めることになった。ちなみに「ときめき隊」の名称は学生の発案によるものである。

2) 住民の声

ふるさとシンポジウムにおいて語られた、各種ワークショップや地域づくり実践への住民の声を以下に示す。

田植え体験

親 A 氏：農家の子供でもなかなか田植え作業に田植えすることがありません。今回の体験は子供にとってとても良い経験ができたのではないかと思っています。

親 B 氏：水田に足を踏み入れた瞬間、足がしずみ「ぬけない！」と不安気にしていた。しかし、歩き方のコツを覚え、また苗の植え方を覚えると調子よくどんどん植え始めた。そして「お母さん、おくらてい

親 C 氏：最初は泥がいやだとか汚いとか言っていたのに（小2）楽しそうに作業をしていた。「おもしろかったね」とい

生き物探索

親 D 氏：体が汚れる遊びをしたがらない長男が友達につられて川に入ったことがとてもうれしかったです。

親 E 氏：「楽しかったね」と笑顔でした。「もっと川で遊びたかった」と言っています。近くでこんなにたのしく遊べるとは思わ

親 F 氏：前日のキャンプの疲れで今ひとつ元気がないまま参加したため、本人も一生懸命取り組むことができず、申し訳ありませんでした。一週間くらい前からお魚を捕まえるよと張り切って

稲刈り体験

親 G 氏：カマを使うのも初めてでしたが、前向きに頑張っていた。束ねられた稲を運ぶことも一生懸命やり、元気な子供の様子をとても

親 H 氏：親も初めてに近い経験のため、ついつい夢中になりすぎ、子供を見ている余裕もないくらいでしたが、一生懸命な姿をみれることは嬉しいことです。

親 I 氏：カマを使っての刈り取りはとても頑張っていました。「コンバインを使わないで全部刈るのは大変だな」といいながらもできるだけたくさん刈り取ろうとする意欲が見られました。袋詰めされたものを一輪車に積んで軽トラックにかついで運ぶ姿を見て、たくましくなったもの

シンポジウム時のアンケート調査による自由記載

地域間交流

親 A 氏：私は始め、この「親子体感教室」のお話を聞いた時、子供たちが 1 年間にわたる活動に嫌がらずに参加できるか、心配でした。春の頃、なれない活動に消極的な時もありましたが、回を重ねるにしたがって、子どもの方から「次はなに？」と聞いてくるようになりました。……今回は 11 組の親子の参加でしたが、もっともっと多くの親子や地域の方々にこの教室の体験をさせてあげたいと思いました。この教室の活動に参加して、日常忘れている地域の自然の豊かさを改めて感じとることができた気がします。常盤に住むもっと多くの人が常盤の魅力に気づいてくれることを願っています。そして、子どもたちに今回の体験を忘れず、大人になってからもこの体験を思い出して、自分の子どもたちに常盤のすばらしさを語れるようになってほしいと願っています。

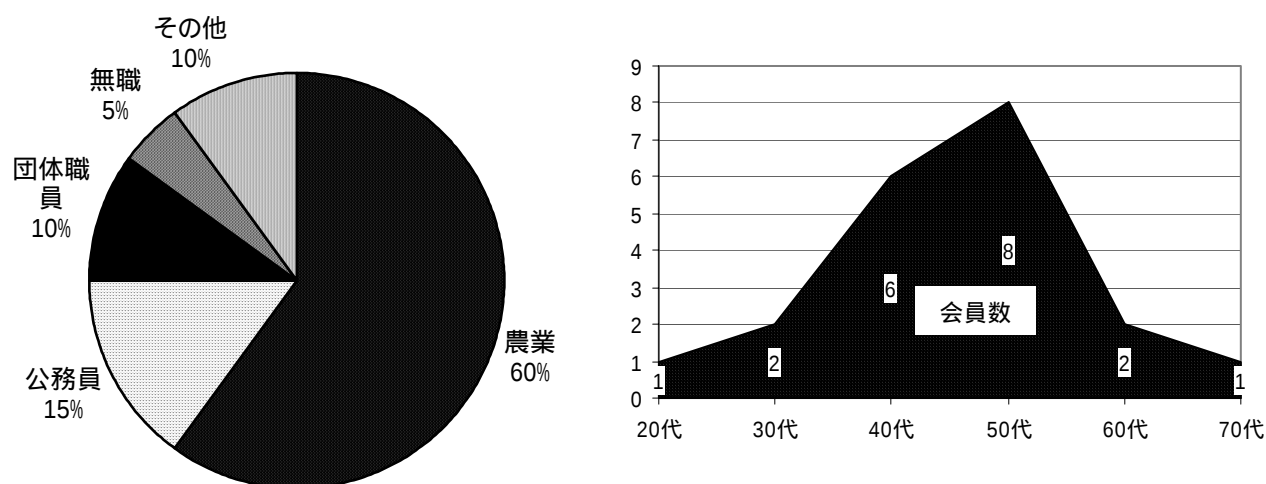
親 B 氏：……私の家は農家ですし、子どもに田植え等を手伝わせようと思えば、出来ない訳ではありません。しかし、「実際は無理だろう」と思ってさせていませんでした。このようなことから、今までしたことのない田植えが果たしてうまくできるのか不安でした。しかし、子どもたちは田植えを楽しみながらとても上手にやり遂げていたことには驚きました。午後からは、体験した様子を絵にする作業や体験の替え歌づくりに取り組みました。子どもたちはクレヨンを使いながら、楽しそうでしたが、親の方は、絵を描くなんてことを相当の期間したことがなかったので、戸惑ってしまいました。しかし、子どもと母親が混じったチームの仲間に助けられて、それなりの絵を描くことができました。これらの活動を通して「子どもはやれば何でもできる!」、さらに「手伝いはさせることは大事なんだ!」ということを学んで気がします。そして私たち母親自身も「仲間と一緒にならば、いろいろなことが出来る!」という自信を得たように思います。……子どもも私も、みんなとの共同作業に慣れてきて、この教室が目指している「常盤の豊かさ」を探してみようという気持ちになっています。……

シンポジウムにおける参加者（親）の発言

3)「常盤ときめき隊」という実行部隊

常盤ときめき隊は、「常盤の里づくり協議会」の第 3 部会内部のグループとして、平成 16 年 7 月 20 日に設立された。この組織の特徴は、第 3 部会メンバーのうち、実践的に活動できる（比較的若い壮年世代）壮年世代が集まり、「常盤地区の農産物を用い、産業の活性化を目指す」を掲げ、設立されたことである（常盤ときめき隊長によるヒアリングから）。現在、会員は 23 名（うち女性 5 名）で構成されている。従事職種は、ほぼ全体の 6 割を農業従事者が占めている。設立当初は産業部会の一部ということもあり、常盤地区で栽培されている農

産物の販路を中心に協議されていたが、これまでの活動では地区外部の人々の交流の受け入れを実施している。それゆえ、常盤地区の新たな地域づくり活動を担っている組織としても過言ではない。



常盤ときめき隊の構成 従事職種・年齢層 N = 20

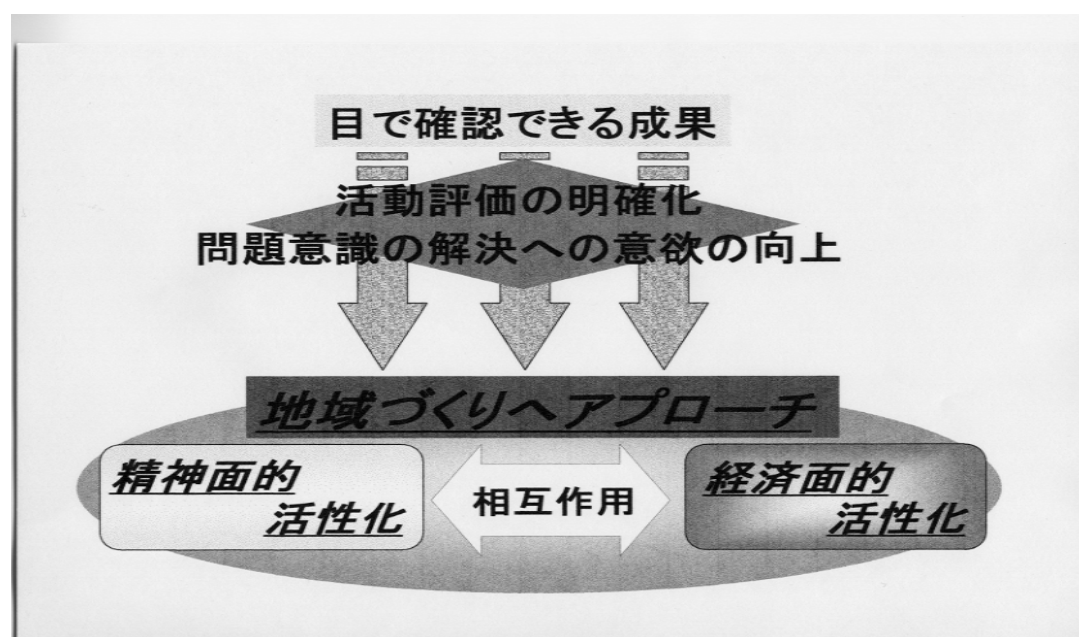
また、「常盤ときめき隊」は、短大が実施した「わの里づくり 親子体感教室」の活動に比較的深く関与した組織といっても良い。その一つの事例として、平成 16 年 11 月 27 日～29 日に短大との連携をとりつつ、東京都港区下北沢 NPO 団体にて常盤減農薬米等の農産物販売に同行し、今後の農産物販路の拡大に前進した。さらにこのことを契機に下北沢 NPO の農村体験交流事業に繋がっている。また、常盤地区内（山谷分館を中心）でモニターツアー（秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会事業）を展開し、これまでに、映画撮影隊（映画「ブリュレ」スタッフ）や日本映画学校の学生の受け入れを行い、今回の訪問者から多く良い反響を受け、今後展開するグリーンツーリズムの体制づくりに良い成果をあげた。今後は、常盤ブランドの確立（安全・安心・健康のイメージ）を目指し、自主運営を行いながら現在試行段階の活動から本格的実践の時期に入っているといえる。

4）住民参加型の地域づくり

このような実践活動を通し、住民参加型地域づくりの有意な意義を見出すことができる。今後の課題の一つとして、地域住民による地域づくりの意欲の継続であると考えられる。これは、地域住民自身が各個別的な欲求を持たし、より良い地域社会を形成していくことを目的としていくのであれば、地域住民の地域づくりに対する欲求の限度に下限がないといえる。よって地域住民が、日々地域づくりに向け、主体性に活動を継続していくことに意義があるからである。

そこで、ここでは特に短大が実施してきた「親子体感教室」及び経済的活性化の活動の経験からみえる、地域活動の方向について述べていきたい。今後、社会教育的効果だけではな

く、目で成果を確認できる経済的効果の活性化も求められてくると考えられる。この教育的効果は、いくつかの機能を持ち備えている。本取組の導入により、希薄化していた地域住民間のコミュニケーションを触発し、多くの協議が短大と地域、そして地域住民同士で頻繁にコミュニケーションが持たれるようになった。このことで地域づくりへの関心は高まってきている。また地域住民との連携活動から地区外部出身の学生自身にも、地域住民の有する生活文化・技術を学び取れるという局面を持っている。さらに、短大の関与により大学の専門的な知識や技術・情報処理能力を地域に提供している。このように他の地域ではみられない専門的なアドバイザーの支援が、地域住民にとってより活動への自信とつながってきているようにみえる。



地域づくりのアプローチ

だが、ここで指摘したいことは、目で確認できる成果である。目で確認できる成果があることは、自らが地域づくりに対してどんな活動をしてきたか評価しやすく、また新たな問題意識の解決に向け努力する傾向になりやすいと考えられる。そして、経済的効果は農村で暮らすことの不安要因を緩和できると考えられる。現在、農村では、過疎化（人口流出）によって、農村資源の維持管理の限界が生じている。追い討ちをかけるように地域生活保全機能の低下が報告されている。

さらに、コミュニティ活動の停滞化は、地域の人々の付き合いの希薄化が起こり、地域社会の連帯関係が失われつつある。これらを打破するためには、農村に暮らすことの価値を見出すことと生活を営むためのある程度の所得が必要である。よって両作用の効果が今後求められる必要である。

7. 本プロジェクトの可能性

本取組は、大学教育において従来になかった社会的効果と教育的効果の発現を期待した実践である。当初想定した社会的効果としては次の諸点を考えていた。

地域ニーズに即応したアカデミック情報の活用、
住民と学生との学習機会の創設による住民参加型の地域づくり手法の確立、
地域・大学・行政・産業界の連携による農村的な地域産業の育成、
潜在的商品の発掘・商品開発力の育成、
都市農村交流による相互理解と農村それ自体への再認識 である。

これらの効果は、うへの活動実績にみる通り、相当程度果たされた。とりわけ、短大の多面的な取組は、地域住民の諸グループの発足という結果を招いた。1年目の終わり頃には「ときめき隊」⁴が組織され、2年目の冬には「炭焼き隊」⁵が結成されている。これらのグループは、学生による本取組をサポートしつつ、自ら自発的活動を展開してきている。さらに、住民との協議の中で、NPO法人の起ち上げが具体化した。この法人の内実は、地域づくり会社であり、地域運営についての諸々のボランティア活動を担うほかに、付加価値米等の農産物の販売や都市消費者との交流、グリーン・ツーリズム促進の役割を担うものである。1月には定款を作成し、県の認可を受ける運びである。加えて、環境に優しい農村の暮らしをテーマに生ゴミのコンポスト堆肥と間伐材のプランターを住民が作成し、自らが暮らす地域及びより広域の能代市域を対象にした景観形成にも関与する姿勢がみられるようになってきたのである。これらは、学生を主体とする本取組が、ボトムアップ型の地域づくりに大きな成果を挙げたことを物語るものといえよう

本取組から導き出せる魅力的な地域づくりの要点として以下5点が指摘できる。

1. 地域住民が地域課題を認識し行動すること
2. 忘れていた地域のもつ資源を再発見すること
3. これからの地域を担う子供たちへその良さを継承すること
4. 住民同士や行政が一体化した連帯体制を図ること
5. 農村資源の見直しと農村らしさを重視した発展的な地域づくりを模索すること

最後に、本取組の経験を「農村づくりモデル」として示すとすれば、おおよそ以下のステップを踏んできたといえよう。すなわち、

：＜過疎化、高齢化、経済停滞などからみえる10年後の「ふるさと」＞についての
真剣な協議・検討

・「自分の家族や近所の家族が、10年後、何人になるか？」という問いを投げかける。このような地元情報は相当に正確であり、結果として、集落人口がどのように変わり、どのような人口構成を示すかが、実感として認識できるだろう。

：＜やればできる＞ことの確認作業

- ・ステップ1：ふるさとの将来像？ <ex. 何を残したいのか>
- ・ステップ2：ワークショップの実施（「子供達と一緒に」が効果的）
 - ・ふるさと資源探し、川遊び、小径探検など
- ・ステップ3：具体的なテーマに即した実践
 - ・地域イベントづくり（冬祭り等）
 - ・お米（減農薬・天日乾燥米→TEN PI）の生産と販売
 - ・ベツレヘムの星の栽培と販売
 - ・ダチョウの飼育と加工（料理試食会）
 - ・景観形成と資源利活用「間伐材プランターづくり」
- ・ステップ4：シンポジウム、自己評価（反省）→地域への浸透
- ・ステップ5：活動の継続性を確保 → NPO 法人づくり

補 注

- 1 NPO法人コスファとは、下北沢周辺の住民有志と生活クラブ生協の有志により、個々人のライフスタイルを尊重し、それぞれの能力にみあった社会貢献的諸活動（一時保育、貸しギャラリー、給食サービス、パソコン教室等）を展開していたC O S下北沢の活動を、2003年7月にNPO法人として再構成した組織である（12月認証・登記）。
- 2 この年度の活動は、秋田テレビの取材によって、「おんな6人、やるべ！むらおこし」という1時間のドキュメンタリー番組となり、平成17年11月にフジテレビ系で全国放送された。
- 3 この花は10年ほど前に男鹿地域の花農家から「葉に汚れがあり、病気ではないか」との要請で、短大に持ち込まれたものである。分析の結果、ウイルスに罹っていることが判明し、そのウイルスの除去方法が本学で確立していたのであるが、市場出荷は考えられていなかった。現在、オーニソガラムという花は、市場で若干流通しているがそれらのほとんどはウイルスに罹っており、本学の有するオーニソガラムとは大きさや美しさにおいて異なるものである。よって、農村再生プロジェクトにおいて、その花の農家への普及と商品化を企画したのである。
- 4 「ときめき隊」は、常盤の里づくり協議会の下部組織である産業育成部会のメンバー有志が、農産物開発等に関して実践的に動ける集団が必要であると考え、協議会に寄り添いつつ、短大の取組にも積極的に関与できるグループとして立ち上げたものである。
- 5 「炭焼き隊」というグループは2年目の終わり頃に、常盤独自の経済的活動として、かつておこなわれていた「炭焼き」を再現させることを目的に、有志10名で発足させたものである。平成17年の12月には80歳の高齢者を先頭に、炭焼き窯を自力で制作し、平成18年3月から白炭生産を始めている。木炭として販売するほかに、粉碎炭の圃場への還元も試行されている。

3. 「秋田県北、北秋田市阿仁地区、八峰町八森地区における生活・文化資源の検証と持続的地域づくりプロジェクト」

国際教養大学地域環境研究センター



1. 調査目的とその意義

本研究プロジェクトでは秋田県北地域に現存または継承される多様な生活・文化、建築資源の価値を再検証し、検証結果を学術的アウトプットとイラスト等を用いた審美的アウトプットとして生産し、その成果を当該地域の持続的コミュニティ構築のための起爆剤、また滞在型、体験型、学習型観光としてのエコ・ツーリズム推進のための材料として活用する。

本プロジェクトにおける調査研究対象は県北地域に継承されながらも、現在、過疎・高齢化により消滅の危機に瀕している、地域住民がそれぞれの気候・風土の中で培ってきた自然との共生の知恵、地域内における里山利用に関する各種取り決め、知恵の結晶体としての各種道具、地元資源を活用した建築物やそれらが形成する景観、といった、生活・文化環境資源である。本調査によってこれら消滅の危機にある上記資源は記録、分類、整理され、形として残るだろうし、またそれらの資源は環境学習、体験・滞在型としてのエコ・ツーリズムの素材として当該地域の持続的地域づくりに活用されるだろう。

グローバリゼーションが進行する現代においては、全てにおいてスピードが求められる。例えば物について言えば、生産、消費、廃棄、そしてまた新しい製品の開発のサイクルが極めて早い。またインターネットの普及とともに誰もが大量の玉石混交の情報を入手し、それら情報をしっかり吟味・検証するまもなく情報の波にもまれ続けている。グローバリゼーション進行の過程で、多くの先人の知恵、記憶、生き方といったものが急速に喪失している。技術革新や情報化時代という美辞麗句のもと、新しい情報、技術、物をひたすら追いつける事が本当に健全なことなのか、我々の将来世代もこのパラダイムの中で生きていくしかないのか、という本源的な問いを一度ゆっくり立ち止まって考え直す機会を提供する意義がこの

プロジェクトは内包している。本研究を通し、先人たちがそれぞれの地域の土地、水、植物、空気、動物、気候、習慣、といった地域固有の要素の中で長い時間をかけて培ってきた自然との付き合い方、または自らの手で作った各種道具、厳しい条件下で多くの家族が生き延びるために継承してきた知恵、そして、それらによって形成された生活景観ともいべき有形・無形の資源をもう一度多角的に検証することは、地域資源の再発見という学術的意義、または観光推進による地域活性という政策的意義を越えた意味合いもある。

本報告書の構成は、まず阿仁、八森地区における聞き取り調査の結果報告、次に秋田県立大学高度木材研究所渡辺千明准教授の報告、そして秋田公立美術工芸短期大学の菅原香織助手の報告書、そしてフリーの鉛筆画家高橋郁恵作の県北地域の建造、景観図から成り立つ。

2. 調査対象地区

a) 阿仁地区概要と問題点

本研究プロジェクトの対象地域である北秋田市阿仁地区は、秋田県中央内陸部に位置する、森林が面積の94%を占め、冬には積雪2メートルを超える日本有数の豪雪地域である。県都秋田市から北東へ車で約1時間半の内陸部に位置し、周囲を山で囲まれた地理的条件ゆえ、各種社会資本整備が最も後回しにされた地域ながら、特別天然記念物クマゲラ生息地の県立森吉山公園、日本の滝百選の第2位に選出された安の滝、マタギの歴史と伝統、野生ツキノワグマの研究調査フィールドであるクマ牧場、熊鍋や豊富な山菜・キノコ料理、国重要無形文化財の根子番楽に代表される各種神楽・番楽、獅子踊りといった郷土芸能など豊富な潜在的観光資源を有している。かつては豊富な産銅で隆盛を極めた阿仁鉱山や恵まれた広葉樹伐採・搬出・原木生産を主とする林業といった天然資源依存型素材産業が主流であった。しかし鉱脈の枯渇と安価な輸入材攻勢により両産業とも斜陽化し、若者は雇用機会を求めて域外に流出し過疎高齢化が急速に進んだ。行政・地元商工会、事業主などは地域の自然・歴史・文化資源を活用した観光産業、特に体験・滞在・学習型観光の開発と展開が残された唯一の地域活性策であるとの認識を共有している。

阿仁地域は鉱山業、その後林業への基幹産業の転換を経る中で、昭和35年の人口11,000人をピークに年々減少し、現在人口4,000人を切り、人口減少率60.8%、高齢化率37.6%の国内でも指折りの過疎・高齢化地域である。また当地域における「マタギ」と呼ばれる狩猟活動に代表される生業文化は、貨幣経済の隆盛や産業構造の変化といった時代の変遷とともに徐々に失われつつある。これらのことから、観光振興に代表される地域経済の再生と、貨幣経済の浸透や経済・社会活動のグローバル化によって失われていく生業文化としての「地域らしさ」の維持といった二律背反的な課題を乗り越えていくための地域振興策が求められている。また人口減少や地域経済の衰退とともに問題とすべきは、地域コミュニティの崩壊現象である。農林業がまだ主流であった昭和30年代後半までは多くの作業が集落単位で行われていた結果発達した「結」が、農林業の機械化と兼業農家の増加とともに徐々に失われて

きている。また集落で継承されてきた各種祭礼、伝統芸能も少子化の進行による後継者不足や地域での集まり自体の減少によって消滅しつつあり、それらは地域への愛着・誇りの喪失要因になりつつある。この地域の絆の喪失は、独居老人の多いこの地域では別の問題を生み出している。つまり自己の地域住民としての存在意義の希薄化や地域の安全を住民自らが守る防犯・防災体制、地域で声を掛け合ってお互いの健康状態を確認し必要に応じて助け合うといった相互扶助の仕組みの消滅をも意味している。地域が再生するためには地域住民の絆を復活・強化するための仕組みと、若者が地域に残るための雇用創出が絶対条件である。

これらの課題を解決するために地域振興局主導の観光推進事業や、国際教養大学地域環境研究センターによる地域資源発掘・研究事業などが展開されており、持続可能な地域作りに向けた萌芽的な動きが現在進行している。この国際教養大学地域環境研究センターとは秋田県内の自然、文化、伝統、生活、食資源等に関する学術調査を実施し、それらの成果を研究対象地域の内発的地域活性に反映・貢献することを目的として設立された学内の研究機関である。センターは平成の大合併前の阿仁町へ開学初年度より深くかかわっており、平成 16 年度には阿仁町への資源発掘予備調査に対する研究費として学長プロジェクトの予算配分を受けた。この研究を基礎として、平成 17 年度の科学研究費基盤研究 (C)「過疎地域の資源発掘とエコ・ミュージアム構想による内発的地域振興策」の助成を受け、当該地域の多様な資源を各研究員の異なる学問的見地から学際的に研究をしている。また、同センターは、野生動物と人間の共存・住み分けを可能とする環境や保護管理施策のあり方を社会科学的視点から考察する事を目的として、平成 18 年度の科学研究基盤研究 (C)「野生動物保護管理における住民参加の果たす役割の検証」研究への助成を受け、自然環境の変化により絶滅が危惧される野生動物のうちツキノワグマと人間の軋轢を研究している。加えて、センター研究員は研究分担者として、東北芸術工科大学の田口洋美を研究代表者とする平成 18 年度科学研究費基盤研究 (B)「少子高齢化時代における持続的資源利用型狩猟システムの開発に関する新領域研究」において、大型野生動物 (クマ、シカ、イノシシ、サル) の保護や生息地環境の保全には、野生動物と日常生活の中で深くかかわりを持って生きてきた地域住民の歴史や文化を、野生動物の持続可能な資源利用として活用しつつ保護管理を行うための新たなシステムの開発が必要であるとの認識の下、研究を行っている。この研究は、まさに阿仁地区のマガギの歴史や文化に学び、人間と野生動物の共存共生関係を維持することに貢献することを期待されている。

b) 八峰町八森地区概要と問題点

秋田県北沿岸部に位置する八峰町は旧八森町と峰浜村が合併し誕生した町である。北を青森県境に接し西に日本海、東に世界自然遺産に登録されている白神山地に挟まれ、町の面積の 80% 近くが森林の林業と漁業の町である。町の広大な森林は白神山地の一部で、秋田白神県立自然公園に指定されており、また、起伏に富んだ八森地区の海岸も八森岩館県立自然公園に指定されている。ハタハタ漁で有名な八森地区は世界遺産地域の玄関口として、体験・滞在・

学習型のエコ・ツーリズムや釣り、海水浴、マリンスポーツを取り入れたブルーツーリズムなどによる地域活性に向けての潜在的可能性が高い地域である。秋田県山本地域振興局もこれらの恵まれた資源に注目し、地域内のガイドや旅行業者、エコ・ツーリズム実践者のネットワークを図るため「しらかみeネットワーク」を立ち上げ、平成18年度より重点プロジェクトとして遺産地域周辺の自然、伝統・文化、食資源を活用したエコ、グリーン、ブルーツーリズムの推進を試みている。

八峰町も少子・高齢化が著しく、高齢化率も30%を超え、かつ県内で最も自殺率高いのがこの町を含む山本地域である。かつては漁業・林業で栄えていたが、ハタハタ漁も乱獲と魚付け林の過剰伐採により不振が続き、林業も外材攻勢によりやはり斜陽化している。阿仁地域同様この地域も基幹産業の衰退とともに地域コミュニティの崩壊現象が見られ、このままでは集落の存在そのものが危機に瀕するのは時間の問題である。

3. 調査手法

本プロジェクトにおける研究対象地は北秋田市阿仁地区、(平成18年3月の合併前は阿仁町)にある3つの集落、打当、比立内、根子と八峰町八森地区である。阿仁地域における調査は「山・森」によって形成された集落のいわゆる山村生活文化研究であり、八森地区は「山、森、海」によって形成された集落の研究である。

研究アプローチであるが、まず村史、町史、郷土史、統計、自伝、学術誌、新聞などの文献調査を行い、その上で上記3地区と八峰町八森地区において聞き取り調査を実施した。

阿仁地区における聞き取り調査は北秋田市阿仁支所の協力の下、平成19年1月から2月にかけて実施。八森地区は地元のNPO法人白神ネイチャー協会の協力を得て2月中旬にかけて行った。ただプロジェクトの時間的制約により、八森地区の聞き取り調査数が十分な数に達してない。それ故、この地区の調査に関しては現時点におけるデータの分類・整理結果の紹介にとどめる。また十分なデータが整ってない以上、分析もここではあまり行わない。将来、更なる聞き取り調査を実施したうえで次年度以降の研究課題とする。

聞き取り調査人数は阿仁地区でのべ51名、八森地区で12名である。聞き取り調査は4人1グループで実施し、一人がインタビュアーとして質問をし、1人が記録を取り、2人がインタビュー内容のキーワードを付箋に書き込んだ。また記録の取りこぼしがないようにデジタルレコーダーも使用し、全ての内容を録音した。ノートと付箋に記録されたデータはマイクロソフト社製エクセルに分類・整理した。またデジタルレコーダーを使用しつつ完全な聞き取り調査の記録も現在作成中であり、それらはドイツで開発された定性調査分析ソフトのATLAS.tiに読み込ませ、今後詳細な分析を行う。ちなみに本報告書は時間的な制約からエクセルファイル上に整理・分析したデータを基に作成している。

聞き取り調査における質問事項は予め用意しつつも、あくまでも自然な対話方式で行い、1回の聞き取り調査で約2時間から5時間費やした。質問テーマは大別して、衣食住、燃料、肥料、冠婚葬祭、集落行事、伝統芸能、道具、薬、水、ゴミ処理、ものづくり、伝承・民話、

集落内相互扶助、家族、情報、交通といった項目を中心に行われた。以下が調査結果のまとめである。

4. 聞き取り調査結果データ分析

阿仁地区における調査結果

ここでは阿仁地区における聞き取り調査の結果を分析する。まず、比立内、打当、根子とも周囲を山に囲まれているという地理的条件のせいか、森林資源を主軸に形成された地域と理解することが出来る。例えば食に関していえば、森は熊、カモシカ、兎、山鳥、などの野生動物の生息地として肉食資源を提供したり、山菜、きのこ、または木の実などの食を提供している。これらの食材は各家庭の食卓にのるの皆らず、貴重な現金収入源としての役割もある。阿仁地区の特に高齢者における山菜の場所や、識別、保存に関する知識や経験は特筆すべきものがあり、特に女性たちが作る山菜料理の数、質は注目に値する。また山菜を摘む際には決して採集しすぎず、次の年も継続的に収穫できるように気をつけながら行っている。これは現在においても変わらない。ただ奥地へ伸びる林道整備に伴い地域外住民も山菜取りに訪れるようになり、それらの人々は収奪的な採取をすることである。

森はまた家屋建設における床材や柱、または杉の皮を使った屋根などの建築材料を提供した。また梁などに使用する木材は改築の際にも再利用された。一般的に阿仁地区の家屋は安価な輸入材が流入する昭和 40 年代までは地元材を使って建てられた。森は、薪、炭などの燃料供給源としても利用された。燃やした後の薪や炭の灰は洗剤として利用されたほか、肥料としてもその豊富な燐成分故、畑や田に還元された。もちろん薪、炭、両方とも現金収入源にもなった。また、クロモジの果実はその油を絞り出すことによって、女性の整髪料として椿油の代替品として利用された。

森はまた阿仁合地区における基幹産業であった鉱山業を間接的に支えていた。鉱山労働者の燃料としての薪や炭、食材としての山菜、キノコ、熊・馬肉、鉱山労働者のための長屋建築材、または製錬過程で必要とされる薪の供給など、森林の存在なくしては鉱山産業自体成立しなかったのである。

森は水源涵養の天然のダムとして集落内に生活用水および飲料水を供給する重要な役割を果たしていた。多くの家では沢筋や小川に堤を作り、それを集落で管理しつつ水を確保していた。またそれらの堤周辺は取水、皿洗い、食材を洗う場として主に主婦層の集いの場でもあったようである。

また森は当該地域に平成初期まで稼動していた大阿仁木材という雇用者数 100 人以上の企業を存続せしめ、地域の基幹産業として機能していた。ちなみに林業が盛んであった頃、林業労働者はその熟練技術によって冬期間における他地域での林業作業という出稼ぎ口にも容易にありつけた。

この地域ではまた馬などの家畜の放牧なども森林で行われた。薬に関しても各種薬草や熊

の胆などの当該地域独特の薬は熊を生息ならしめる森なしではあり得なかった。地域住民は自分達の生活が根本的に森林に支えられていることを肌で知っており、個人レベルで、または集落レベルで森林資源が枯渇することのないよう持続的に活用する術を熟知していたように思われる。また森林を持続的に活用するための入会制度もあった。加えて生活基盤を支える森に対する感謝の精神が彼等の基層に継承されていて、それは集落内に存在する山神さまへの定期的参拝やその神前における集落住民の集いという形態に表れている。ちなみに山神さまに御参りするというのはマタギだけではなく、地域住民に深く根ざしている信仰形態である。

一方で、安価な外材の大量流入により国産材が下落し、基幹産業としての林業が斜陽化し、また熊の狩猟に関してもその捕獲頭数は、毎年行政により制限されることから、従来のように自由な狩猟は現在出来ない。山菜、キノコに関しても未だに当該地域の住民にとっては重要な食資源であるが、若い世代の山菜等に関する知識・経験その必要性の希薄化とともに食卓に上がることが少なくなるのではないかと。つまりこれらの世代は、当地に居住しつつも地域外に通勤している。これらの世代は食、建材、燃料資源調達のため森に入るとことは当然しない。食料に関しても仕事の帰りもしくは週末に近隣地域の大型スーパーマーケットで冷凍食品や輸入物の野菜などを購入する傾向にある。これはフルタイムで農林業以外の職についている人間にとって選択の余地がないが、この傾向が続くことにより、遠くない将来、当該住民の森に対する価値観が激変する可能性があるのではないかと。何人かの聞き取り協力者が言っていたことだが、彼等にとって森が彼らの生活になくってはならなかった頃に比べて、現在は山への信仰心が希薄になっているという。これは山・森への信仰心が、その依存度が希薄になると同時に希薄になってきたということの意味するのではないかと。また、戦後の拡大造林によって大量のブナ林が杉に植え代わったことにより、山菜が採れなくなってきたそうである。これはブナの落葉が土壌を肥沃にするという事実と無関係ではない。また、杉の植林面積が拡大してから熊が里山に降りてくるケースが増えたという話は、奥地に熊の食べる実が少なくなってきたということと無関係ではないだろう。加えて人が山に入らなくなったことにより熊が自らの生息域と人間の居住域のとの境界が分からなくなっているとも考えられる。

森によって形成された集落であるという議論を少し離れて、聞き取り調査結果から浮かび上がる他の側面も照射してみる。聞き取り調査協力者の多くの人たちが口を揃えて言うには、昭和 30 年代後半が集落が大きく変容した時代の転換点であるということである。これは、化石燃料の流入と無関係ではないだろう。また化石燃料から作られるプラスチック製品の大量生産とその普及が、当該地域にも浸透始めたのもこの時期からであることを考えると、従来は森を基軸とした自然資源が集落内の生活を大きく支えていた地域内完結型システムがこの時期を境に変化したと見るべきであろう。つまり集落外からの資源・食料の流入によって集落の自立的資源循環システムが劇的に変化した。これはただ単に様々なものが集落外から入ってきたということだけではなくて、集落のありようをも大きく変えたようである。例えば建材として、または薪や各種道具の材料調達の必要性から、木を伐採するとか、それらを集落に運び込むとか、森林での放牧作業を行うとかは、多くの場面において共同作業を必要し

た。集落内の人々は好き嫌いにかかわらず、様々な場面で共同作業をしていた。ここで注意を要するのはここである。集落住民というのは多くの場合、本家・分家に代表される血縁でつながった人々の集まりということである。今回の調査地域においては、1つの集落で大体三つか四つの姓が代表的であり、その姓を中心とした集まりが集落の基本をなしている。これらの基本的に血縁でつながった人々は生業場面における共同作業のみならず、冠婚葬祭や各種行事、祭礼なども共同で作業していた。これらの機会は、例えば主婦層において漬物や調味料、各種料理方法などに関する情報交換の場になっていたようであり、また集落内の様々な情報を例えば個人レベルの健康状態や、子弟の学校での成績、米や野菜の生育状況といった情報などを共有する場でもあったようである。また集落の子供たちを集落で育てるとというのが昭和30年代後半までは極めて一般的であったが、やはり共同作業の減少につれ、それも希薄になったようである。

共同作業の減少は、特に高齢者間において別の問題を露呈しているようである。独居老人の多いこの地域が多い現状では、高齢者間のコミュニケーション不足がお互いの健康状態を近隣地位で確認したり、何かあった場合には緊急の連絡をし合うという、従来一般的であった集落単位での心身面の相互扶助にも影響が出ているようである。

昭和30年代後半が時代の転換点であるという点について、もうひとつその要因として挙げなくてはならないのは、農業機械の発達と地域への普及である。機械化農業以前において、特に水田耕作においては共同作業が絶対条件だったが、コンバインなどの農業機械の導入により、その必要性が少なくなった。一方で農業機械購入に要した費用捻出のために現金収入を得る為に地域外職を求め、例えば営林署とかトンネル工事の作業員とかの仕事に従事する人々が増えたのもこの昭和30年代後半である。いわゆる兼業農家の増加減少がこの頃から始まった。このことはまた、野菜や米の品種改良や生産技術の向上により全国的に食料が余剰生産傾向に入った頃でもある。とにかく現金収入が増えたことにより集落外から安価で軽量で便利なさまざまな持ち回り品を購入する傾向が徐々に浸透し、地域の森林資源を使う必然性が徐々に希薄になってきたように思える。

この集団作業の減少は、獅子踊りや番楽といった地域の伝統芸能や伝承を継承する場としての減少も意味する。地域の伝統芸能の継承は、たぶんに辛く長い農林作業が一段落した際に集落の人々が楽しむために行われていたという側面もある。何処そこの家の長男が今年はどうのように獅子を舞うのか、何処そこの誰はお囃子をどう吹くか、といったことは、娯楽の少なかった時代にあっては数少ない楽しみでもあった。

もう1つ集落の共同作業の減少を加速させた要因として聞き取り調査から判明したのは、皮肉にも、道路交通網や情報網の整備である。つまり従来は移動の手段は徒歩であり、集落内のコミュニケーションは基本的に隣の家まで歩いていき、直接会話をするというのが主流であった。しかし車や電話の普及により歩く必要性が減少したことにより、個人の行動範囲は拡大したが従来の生活圏である集落内の付き合いの濃度は減少したようである。また、電話の普及により、わざわざ歩いて近隣まで出かけなくても電話で事を済ませるということも、直接的な会話やまたは共同作業の減少を招いた要因のようである。ちなみに、ここではその是非を判断する意図は全くない。聞き取り調査の結果からそのような図式が浮かび上がって

きたという客観的事実を記述しているに過ぎない。

聞き取り調査全般を通じて多くの住民が口をそろえて言っていたのは、「もの」をとにかく大事に使っていたということである。昭和 30 年代までは基本的には集落内で「もの」を使う材料を調達し、壊れたら「もの」の持ち主または集落内の人々が修理し、出来るだけ長期間、大事にそれらの「もの」は使われていたようである。現在のように安くて便利な「もの」が溢れている時代ではなく、多くの「もの」が集落内で調達、利用、修理されていた時代あっては「もの」を大事に使うということは極めて当たり前だったようである。また、今のように電気または化石燃料を動力とする「もの」ではなく、家畜や人間の手によって動かすものが多かったせいか、それらの使い方には相当程度の熟練度が必要とされた時代だった。

最後に集落間の文化・生活・言語面での差異について触れておく。調査対象地の打当、比立内、根子は同じ阿仁地区でありながら、昭和 30 年代以前はかなり独立性の高い集落であり、このことは江戸時代の村まで起源を遡れるかもしれない。基本的にひとつの集落は歩いて行動できる範囲であり、それは以前は字もしくは大字の単位として括られていた。また同じ打当内でもその中には中村、戸島内、打当内という三つの自治会があり、それらは従来、独立性の高い集落であった。このことは冠婚葬祭における儀式的あり方や、獅子踊りなどにおける伝統芸能の集落ごとの違いに反映されていて、現代においては車で 10 分以内の距離にも関わらず、これらには明確な違いが存在する。また根子にいたっては打当、比立内からは車でも 20 分以上かかることからいまだに言語面でも明らかな相違が見られ、根子の住民に言わせると打当地区の言葉は明らかに自分たちのとは違うとのコメントが多く寄せられた。

5. 持続可能なコミュニティの構築に向けての課題と展開

阿仁地区における聞き取り調査の結果を分析する過程で、当該地区における地域資源、特に森林を基軸とした資源のワイズユースのあり方が浮かび上がってきた。しかし、それらは昭和 30 年代の後半から徐々に希薄化している。加えて少子高齢化の進行に伴いワイズユースの担い手自体が減少してきている。基幹産業がない当該地域の現実においては、これらワイズユースのあり方自体がここ 10 年以内に消滅してしまう可能性が高い。

ワイズユースのあり方を記録しデータベース化することは「本調査の目的」でも述べた通り、学術的にも重要である。しかし本プロジェクトを学術的調査作業と位置付けつつも、当該地域が将来に渡って持続可能であるためには何が必要なのかをここで検証したい。

当該地域が持続可能であるためには、まずこの地域に人が住み続けるかどうかをまず問われるべきである。県内でも突出した過疎・高齢化が進行しているこの地域には基幹産業がない。この現状では本プロジェクトや他の学術的プロジェクトの他に包括的かつ多重的な地域活性化策も並行して行われなければならない。

幸いにも当該地域には豊かな自然、伝統、生活、食資源が存在しており、それらは体験、滞在、学習型観光としてのポテンシャルが高いことはすでに述べた。また、狩猟文化研究やエコミュージアム研究、野生動物と人間の軋轢といった 3 つの研究プロジェクトも文部科学

省の科学研究費助成により同時に行われている。また秋田県北秋田地域振興局が推進している「スローツーリズム事業」も軌道に乗り始めており、これらの観光事業を軸とした雇用創出に期待が寄せられている。これらのことを踏まえつつ、当該地区がワイズユースを継承しつつ、かつ持続可能であるための戦略的概念図を作成してみた（次ページ参照）。１の「集落学の構築」が本プロジェクトの成果に相当すると理解してよい。この作業を通して調査対象地域におけるワイズユースのあり方を調査、分類、分析した。２から７の要素は現在進行中、もしくは来年度から実施されるものを含めて当該地区が持続可能であるために最低必要なアクションである。２の「研究拠点形成」はマタギ研究を基軸として、狩猟文化研究一般、アイヌ、イヌイット、ネイティブアメリカンとの比較研究拠点の形成により、国際的に当該地区の魅力を発信するというものである。当該地域にはアイヌ語との類似性の強い地名が多く残っていて、アイヌとの交流の歴史や狩猟方法の比較研究の場として多くの文化人類学者などの興味を引くだろう。また阿仁熊牧場は、過去に熊の生理学研究の調査フィールドとして使われたことがある。これもやはり国内外の熊研究推進の場として当地における研究者の交流を促進する要素であろう。また、阿仁・森吉地区には多くの縄文文化の遺跡が発掘されており、この分野の研究フィールドとしても魅力的である。３の「後継者確保」は県内大学生を長期間、阿仁地区の高齢者宅に宿泊してもらい、「集落学」の継続的構築を推進してもらう。その際は宿泊先で今回の調査で明らかになった各種「ワイズユース」を学習してもらう。この過程を通して阿仁地区を第２のふるさと、または住み着きたいと思う学生が出てくれば、当該地区のワイズユースがデータとしてではなく人に継承される可能性が出てくる。４の「情報発信機能強化」は集落学の成果を３の県内学生、および地域住民がブログ、インターネット、ビデオなどを通して国内外に発信しつつ、この値をアピールすることを目指す。また国際教養大学は集落学の成果を英、中、露などの言語に翻訳し、阿仁と海外を直接結び付けつつ、やはり交流人口の拡大を目指す。５の「基盤産業強化」は、当地の最大の自然資源である森を活用した産業振興を指す。建材としての価値が外材に駆逐されている現状を考慮すると職人の手によって高付加価値された、例えば、家具や木工芸品の開発、販売といった、基幹産業の強化が絶対必要である。また森に人手が入ることにより、担い手不足で荒廃しつつある里山の再生がなされることが期待される。６は集落学の成果を基にした「エコ・ツーリズム推進」である。前述のように秋田県北秋田地域振興局が１８年度より「スローツーリズム」事業を今後３年間にわたって推進しており、そのメニュー作成には集落学の成果が魅力的な学習・体験メニューとして組みこめるだろう。最後の７はこれら６つの事業を総合的にコーディネートする「人材育成」である。これは、現在当センターが秋田県農山村振興課と１７年度意から実施している地域の多様な資源を連動させ地域活性を担う人材育成を目的として推進している「Akita ふるさと活力人養成セミナー」と連携しながら継続的に阿仁地区から人材を募り、当該地区のコーディネーター育成を図っていく。以上、この概念図に示したように、ワイズユースの継承としての集落学、それと他の施策との連動による持続可能な地域づくりを提唱してみた。持続可能な地域作りは、ワイズユースの検証を継承するだけでは達成できない。それを踏まえつつ現実的に地域の人々が継続的に居住できる各種条件整備があってこそ「絵に書いた餅」に終わらないだけの実現性をもつと信ずる。

1. 集落学の構築【国際教養大学 CRESI により現在進行中】 ● 地域内の歴史、生活・伝統、食資源の発掘と記録 ● 地域に残る「もの」、道具の収集と展示 ● 地域に継承される伝承、民話、民謡の発掘と記録	持続可能な地域 ・ワイズユースの継承 ・自立的地域経済力 ・担い手の育成 ・交流人口 2. 研究拠点形成 ● 狩猟・採集文化（マタギ）研究推進【進行中】 ● 熊生理・行動研究推進 ● マタギと Native American, Inuit, アイヌとの比較研究【進行中】 ● 縄文文化研究 3. 後継者確保 ● 県内大学生の集落ワイズユースへの弟子入り制度【秋田県立大と国際教養大により来年度から実施予定】 ● 「集落学」成果の地域内・中学校における展開	4. 情報発信機能強化 ● 集落プロダの立ち上げ ● 定期的な集落ビデオ作成・発表会 ● 日、英、中、韓による「集落学」の国内外への情報発信 5. 基幹産業強化 高付加価値木材製品と地元特産品の開発 ▶ 地元森林組合、職業訓練校、建設業者、家具作り職人、県内大学との連携強化 マタギデザイン、ブランドデザイン、パッケージング強化による 地場産品の開発、見直し、販促【地元商工会と協議中】 毎冬開催の【阿仁食の祭典】出品作の全国展開 6. エコ・ツーリズム推進【県振興局事業で展開中】 ● 番学、神楽、獅子踊りサミットの開催 ● 県内外小中学校との修学旅行の推進 ● 「集落学」成果をプログラム化 7. 人材育成 上記事業をトータルに推進するコーディネーターおよびプロデューサーの育成 ● 【国際教養大学地域環境研究センターと県農山村振興課共催による【Akita ふるさと活力人養成セミナー】による人材育成事業が進行中】
--	---	---

黄色は現在進行中

緑色は来年度からの実施が決定